

史跡 武田氏館跡IV

平成9年度西曲輪試掘調査・土橋等石積測量調査、
平成7～9年度笹堀試掘調査、概要報告書

1999

甲府市教育委員会

序

最近の地方行政を取り巻く状況の中で、文化財への評価が高まり、積極的にまちづくりにいかされています。戦後、半世紀を過ぎ、高度成長期を経て地方都市がミニ東京化し、そのまちの表情が何か薄くなってしまったことは事実です。

まちの個性は自然環境と歴史環境、さらにはその中で永々と営まれてきた人々の営みによってつくられてきました。これからまちづくりは歴史や文化を重視したまちづくりが不可欠であり、文化財は金銭に替えがたい貴重な財産であります。これを後世に引き継ぎ、まちの表情を再び取り戻すことが、今、私たちの大きな課題ではないでしょうか。

本市の「回復・交流・育成、そして未来へ」を理念とした『甲府市新総合計画』でも、長い歴史の中で先人たちが培ってきた市域の文化や自然・伝統産業などを守り、未来に伝えていくことが大きな柱となっております。また、本市職員による自発的まちづくり提言グループ「甲府市まちづくり委員会」のメインコンセプトは、「甲府城を活かしたまちづくり」であり、このことは歴史の重みがそのまちに奥行きを与え、品格ともいえる風情を表現できることを今日的に評価したものといえるでしょう。

甲府市教育委員会では、平成6年度に地域住民の御協力をいただく中で、「史跡武田氏館跡保存管理計画」を策定いたしました。また、平成7年度には「史跡武田氏館跡整備活用委員会」を設置し、文化庁や山梨県教育委員会、地元関係者の皆様の御指導・御協力をいただく中、5か年計画で整備基本構想・基本計画の策定に取り組んでおります。

本書は、この計画策定のために平成9年度に実施しました西曲輪試掘調査・他の概要報告書でございます。武田氏のすぐれた築城技術を示す樹形虎口について、3時期にわたる構造の変遷が把握されたことは大きな成果であり、全国的にも注目を受けております。

本報告書が中世城郭研究深化の一助となるとともに、郷土学習の資料として活用されるよう、念じてやみません。

末筆ながら、調査に当たり一方ならぬ御指導と御協力をいただきました文化庁・山梨県教育委員会、史跡武田氏館跡整備活用委員会の諸先生方、武田神社、並びに発掘調査や遺物・図面整理に従事していただいた方々に、厚く感謝申し上げますとともに、今後も引き続きのお力添えをお願い申し上げます。

平成11年3月

甲府市教育委員会
教育長 丸 晃

例　　言

1. 本書は山梨県甲府市古府中町・屋形三丁目・大手三丁目地内に所在する国指定史跡武田氏館跡の、整備基本構想・基本計画策定に関わる平成9年度西曲輪試掘調査、土橋等石積測量調査、及び平成7~9年度に実施した篠塙試掘調査の概要報告書である。
2. 本館跡は、昭和13年(1938)に国史跡の指定を受け、調査は文化庁・県教育委員会・史跡武田氏館跡調査団の指導の下、甲府市教育委員会が主体となって実施した。調査経費は国・県の補助金の交付を受けた。
3. 西曲輪試掘調査担当は志村憲一・佐々木満・伊藤正彦・富永小枝・石積測量調査・篠塙試掘調査担当は志村憲一である。
4. 本書にかかる調査地区・調査実施期間・調査面積は各章「調査の概要」で記す。
5. 西曲輪試掘調査では作図に際して、有隣会社東雲測量の協力を得た。
6. 石積測量調査では、株式会社シン技術コンサルに立面図の作図を委託した。
7. 本書の執筆は、数野雅彦・信藤祐仁・志村憲一・佐々木満が分担し、各章文末に文責を記した。
8. 本書の挿図は、笠井由美・鈴木由香・富永小枝・内藤真千子・内藤かおり・林久美子・藤井武美が作成した。
9. 本書の編集は、市瀬文彬(文化芸術課長)を編集責任者とし、数野雅彦が行った。
10. 本書に係わる出土遺物及び記録図面・写真等は甲府市教育委員会で保管している。
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたっては、次の機関及び諸氏から御指導・御協力を賜った。記して感謝申し上げたい。
文化庁文化財保護部記念物課・山梨県教育委員会学術文化財課・帝京大学山梨文化財研究所・武田神社・地元関係自治会
池田誠・桂田保・加藤理文・北垣聰一郎・木戸雅秀・小林敏宏・坂井秀弥・柴田龍司・鈴木稔・田代孝・田中則和・西脇総生・畠大介・増渕徹・松田直則・宮里学・宮田毅・宮武正登・室伏徹・山下孝司・山川均

凡　　例

本書に掲載した遺構図・遺物実測図は以下のとおりである。

1. 遺構・遺物番号は、各調査地区単位で通し番号とした。ただし、西曲輪調査は、トレンチ番号を楔形虎口と中段平場で通し番号とした。
2. 遺構名は、各遺構の性格や形状に応じて名称を付したが、西曲輪の調査における遺構名称・番号は、将来、面的な調査等により全体の把握がなされた場合、変更が生じる可能性がある。よって、本書で付した遺構名・番号は暫定的なものとする。
3. 全体図・遺構・遺物実測図の縮尺は、図面上に表示したスケールのとおりである。
4. 遺構断面図における水平数値は、海拔高度を表示し、単位はmである。
5. 採図中のE・W・S・Nは、東・西・南・北を表す。
6. 遺物観察表中の色調は『標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修 1997後期)に基づいて記載した。
7. 実測図内のスクリーントーン指示は以下のとおりであるが、部分的に指示を個々の図面上に表示したものもある。



……地山



……疊層・石



……未調査部

調査組織

平成10年度

[史跡武田氏館跡調査団]

団長	磯貝正義	山梨大学名誉教授
	清雲俊元	山梨郷土研究会理事長
	小野正敏	国立歴史民俗博物館助教授
	萩原三雄	帝京大学山梨文化財研究所所長代行
	篠本正治	信州大学教授
	八谷與志夫	山梨県埋蔵文化財センター主査文化財主事
	鈴木誠	東京農業大学助教授
	杉原初男	山梨県教育委員会学術文化財課長
オブザーバー	伊藤正義	文化庁文化財保護部記念物課調査官
	小野正文	山梨県教育委員会学術文化財課主査文化財主事
	森原明廣	山梨県教育委員会学術文化財課主任文化財主事

教育委員会(事務局)	金丸晃	教育長
	山本承功	教育部長
	古屋久昭	教育部次長
	斎場和男	教育部次長
	市瀬文彬	教育部文化芸術課長
	数野雅彦	教育部文化芸術課文化財係長(史跡整備担当)
	信藤祐祐仁	教育部文化芸術課文化財係長(埋蔵文化財担当)・文化財主事
	伊藤正幸	教育部文化芸術課文化財係主任・文化財主事
	平塚洋一	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
	志村憲一	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
	佐々木満	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
	伊藤正彦	教育部文化芸術課文化財係・文化財主事
	笠井由美	教育部文化芸術課文化財係嘱託(遺物・図面整理)
	鈴木由香	教育部文化芸術課文化財係嘱託(遺物・図面整理・発掘調査員)
	内藤かおり	教育部文化芸術課文化財係嘱託(遺物・図面整理・発掘調査員)
	中村里恵	教育部文化芸術課文化財係臨時職員
	富永小枝	武田氏館跡発掘調査員

西曲輪・篠掘試掘調査、土橋等石積測量調査のスタッフ

一般参加者

雨宮英郎	池谷富士子	岡悦子
小沢菊太郎	金井いく代	岸本美苗
倉田勝子	栗田宏一	小池孝男
小宮通子	三枝袈裟男	坂本しのぶ
佐田金子	清水公子	末木義光
武井美知子	手塚房子	塚原生司
中田芳仁	長沢晴雄	根岸利昭
花曲敬子	平沢則子	望月利子
宮川敬生	渡辺茂	渡辺百合子

(都留文科大学)

上原明子	奥田文乃	柿原豪
柏嶺善隆	神林啓介	古賀明日香
笛内志保	高田あや	内藤千愛
平井淳	船場昌子	水上豆
宮内美和		

(東京大学)

浅沼志織	大沢寛	岸村顕広
篠田朋孝	竹内大明	田野裕之
中上周平	芳賀俊之	横内潤一

(信州大学)

逸見大悟	大森英志	森井隆史
------	------	------

(京都橘女子大学)

青木真由美	池成夕子	小野奈緒美
香山由貴	小松綾子	富田しのぶ
眞鍋扶美子		

(東京理科大学)

魚住幸世	岡田麗
------	-----

(立正大学)

土屋一未

遺物・図面整理

内藤真千子	林久美子	藤井武美
-------	------	------

【史跡 武田氏館跡整備活用委員会 委員名簿】

平成11年2月1日現在

委員長	金丸 晃	甲府市教育長
副委員長	磯貝 正義	山梨大学名誉教授
委員	清雲 俊元	山梨郷土研究会理事長
同	小野 正敏	国立歴史民俗博物館助教授
同	萩原 三雄	帝京大学山梨文化財研究所所長代行
同	榎本 正治	信州大学教授
同	八巻 與志夫	山梨県埋蔵文化財センター主査文化財主事
同	鈴木 誠	東京農業大学助教授
同	荻野 巍	相川地区自治連合会長
同	保坂 賢	日影自治会長
同	山本 照男	峰本自治会長
同	数野 和夫	大手自治会長
同	竹下 順一	大手東部自治会長
同	土橋 勝夫	武田神社宮司
同	杉原 初男	山梨県教育委員会学術文化財課長
同	川名 正剛	甲府市議会議員
同	谷川 義孝	甲府市議会議員
同	渡邊 貴	甲府市都市整備部長
同	山本 承功	甲府市教育委員会教育部長

目 次

序
例 言
凡 例
調査組織
史跡武山氏館跡整備活用委員会委員名簿
日 次

第1章 西曲輪

第1節 調査の概要	
1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法	1
3 調査の経過	1
第2節 西曲輪の概要	3
第3節 北側樹形虎口	
1 虎口空間	3
2 門 跡	5
3 下層造構	8
4 出土遺物	10
第4節 中段平場	
1 石列・石積	10
2 溝 跡	12
3 その他の遺構	12
4 出土遺物	17

第2章 石積測量調査

第1節 調査の概要	25
第2節 石積測量調査	
1 主郭部人手土橋	26
2 主郭部北側土橋	27
3 主郭部西側土橋	27
4 西曲輪北東部塙法面	27
5 主郭部大手虎口	27
6 主郭部西側虎口	29
7 西曲輪南側樹形虎口	29
8 その他の石積	30

第3章 垂堀試掘調査

第1節 調査の概要	
1 調査に至る経過	39
2 調査の概要	39
第2節 堀試掘調査	
1 平成7年度調査	39
2 平成8年度調査	41
3 平成9年度調査	45
4 出土遺物	46

第4章 調査の成果と課題

第1節 西曲輪	52
第2節 石 積	52
第3節 堀	53

付 図 平成7～9年度調査範囲図

第1章 西曲輪

第1節 調査の概要

1 調査に至る経緯

西曲輪試掘調査は、武田氏館跡整備基本構想・基本計画の策定に関わる基礎資料収集を目的とし、平成7年から5か年計画で館跡各所の調査を予定しているものの一環である。既に平成7年から8年には味噌曲輪・中曲輪の調査を実施し、その成果の一端は「史跡武田氏館跡III」に報告している。

西曲輪の調査地点に関しては、第6回武田氏館跡調査団会議で討議し、平場空間の利用状況の把握を目的とした中段平場と、武田氏の築城技法の一端とされる樹形虎口の構造把握を目的とした北側樹形虎口を調査することで、第5回武田氏館跡整備活用委員会において承認され、調査を実施している。

2 調査の方法

史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画策定に関わる基礎資料の収集を目的とした試掘調査であり、幅2mのトレンチを原則としている。発掘調査区の設定に際しては、武田氏館跡調査団会議において協議し、承認を得て実施している。調査区は曲輪内の空間袖に合わせて、任意で設定しているが、調査トレンチ並びに検出された遺構は、光波測量器を用いて座標軸上に情報を記録している。出土遺物の取り上げに際しても、遺構確認面上で掘削時に移動のない陶磁器類、及び土器類は光波測量で座標軸上にドットとして記録している。ただし、最も多數を占めるかわらけは、径約2cm以上のものを、光波による取り上げ対象としている。

調査における掘削は、すべて手作業で行い、地下遺構に十分配慮しつつ調査を実施している。樹形虎口・中段平場でトレンチの番号は全体で統一しているが、遺構・遺物番号は、個々の調査地点毎に番号を付している。

樹形虎口は、東西南北の上空にかかるようにトレンチを設定し、平坦面及び石積周辺等にも部分的に10か所のトレンチを調査している。調査面積は合計約600m²である。

中段平場は、東西20m、南北10mの十字トレンチを設

定し、西側には小規模なトレンチを設けた。調査面積は合計約50m²である。

3 調査の経過

西曲輪試掘調査は、北側樹形虎口と中段平場を同時に開始したが、平成9年7月22日から調査に着手し、平成9年12月23日には調査を終了している。調査期間は、合計89日間である。なお、トレンチ番号は現場段階の番号ではなく、本報告書作成時に番号を付け直しているため、トレンチ番号が前後するが、御容赦いただきたい。

7月22日	調査箇所の下草刈り
7月24日	草刈り終了、北側樹形虎口調査区設定（トレンチ番号1～9）
7月25日	第3・7トレンチ掘削開始
7月28日	第4トレンチ掘削開始
7月31日	中段平場調査区設定（トレンチ番号10～13）、第12トレンチ掘削開始
8月5日	第1トレンチ掘削開始、第12トレンチ内1号石列検出
8月6日	第6トレンチ掘削、石列検出
8月8日	第7トレンチ内1号石列検出
8月11日	第12トレンチ内1号石積東側検出
8月12日	第12トレンチ内ピット1・2号検出、第10・11トレンチ設定、掘削開始
8月19日	第12トレンチ内1・2号溝跡、ピット3検出
8月20日	第11トレンチ内2号石積検出
8月21日	第11トレンチ内1号土坑検出
8月22日	第11トレンチ内3号石積検出
8月25日	第12トレンチ内1号石積中央部及び西側検出
8月27日	第13トレンチ設定、掘削開始
8月29日	第13トレンチ内2号石積検出
9月25日	第9トレンチ掘削開始
10月2日	第8トレンチ掘削開始、第9トレンチ内礎石列検出
10月3日	第8トレンチ内礎石列検出、(第9トレンチと合わせ2号門跡)
10月6日	第12トレンチ内ピット4・5検出
10月7日	第10トレンチ炭化物層検出、第2トレンチ掘削開始
10月8日	中段平場全体撮影、調査終了、第6トレン

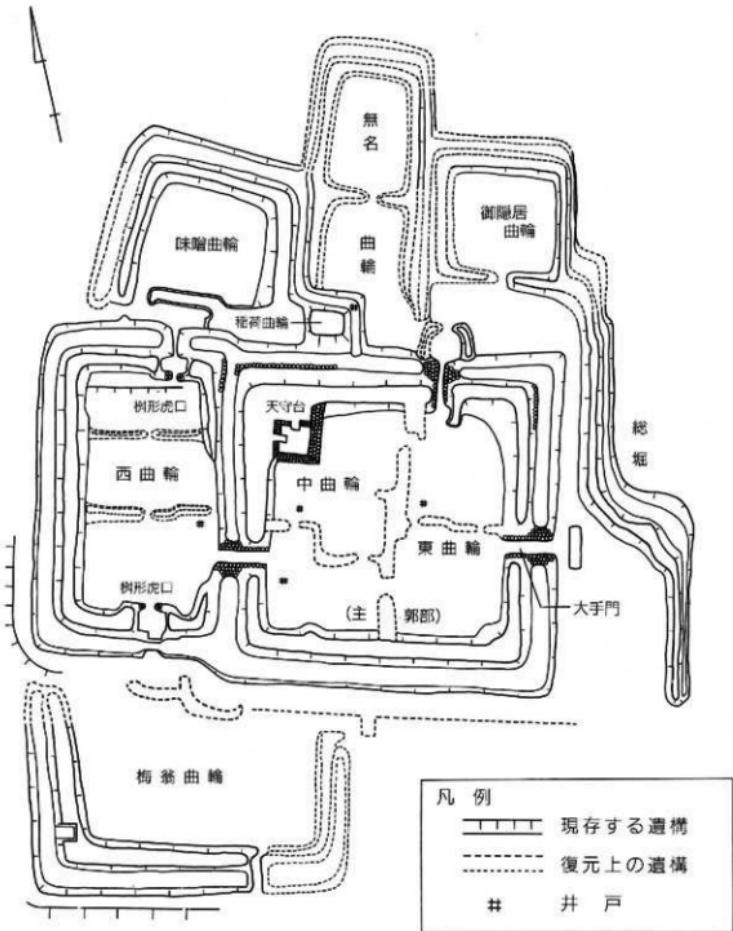


図1 武田氏館跡曲輪配置図

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| チ北側石積検出 | 12月16日 北側樹形虎口全体撮影、埋め戻し開始 |
| 10月13日 第5トレンチ掘削開始、第2トレンチ内1号門跡 | 12月23日 北側樹形虎口調査終了 |
| 10月17日 第5トレンチ内石列検出 | |
| 10月30日 北側樹形虎口掘削及び作図終了、一時中断 | |

第2節 西曲輪の概要

定

主郭部の西側に隣接する。二町（一町=約109m）四方の規模を有する主郭部の約半分の大きさで、東西一町・南北二町を測る。この曲輪は、「高田城記」の記述から武山信玄（信玄）の嫡男義信が駿河今川氏の娘を迎えるに当たり、前年の天文20年（1551）に建設に着手し、翌年春に完成したものと考えられている（斎野1988）。現在、西曲輪には、甲府市藤村記念館（重要文化財旧陸澤学校校舎）が移築・復元されている。

周囲は堀と土塁で囲繞されており、東側の堀は主郭部との共有であるが、西曲輪は主郭部に対し若干北に位置をずらして造営されている。堀は傾斜する自然地形の関係で、南半が水堀、北半が空堀となっている。土塁は主郭部とほぼ同等の規模を有し、曲輪内部から3~6mの高さを測る。しかし、主郭部に面する西曲輪東側では北から徐々に低くなり、土橋手前で全く認められなくなる。西曲輪北側虎口東側の土塁は、上部に東西約11m・南北約12mの平坦面をもち、構台として機能したと推定されている。

出入口部は東・南・北の三か所に設けられており、南・北は武田氏の築城技法を示す樹形虎口となっている。両者の前方には馬出土塁が構築されたが、各種古絵図には武田系城郭に特有な丸馬出ではなく、角馬出として描かれている。信玄・勝頼時代の館を記したと付記される恵林寺所蔵「甲州古城勝頼以前図」が、それぞれの樹形虎口と馬出空間との間の土橋を真ん中付近で切断して表現していることから、かつて橋が架けられていたと考えられる。北側樹形虎口の前方は、現況では細い上橋であり、武田氏滅亡後に改修されたものと思われる。

曲輪内部には3段の平場が造成されている。上段は土塁に沿って東西に延びる小規模な平場で南北幅10~11mを測る。約1.5m下がった中段の南北幅は約35m、中段から約1m低い下段は約78mを測る。西曲輪内部を区切っていた土塁は消滅しているが、「甲州古城勝頼以前図」には曲輪を南北に区画する上界がほぼ中央に記され、他の多くの古絵図では2本の東西七星が曲輪を3分している。

西曲輪は、一部の古絵図に「台所曲輪」「人質曲輪」の名称が見え、「甲斐国志」は「夫人衆女ノ所レ居ナリシト云」と記録する。西曲輪の確実な記録としては、次の史料が知られている。

於西之御館、別面致奉公之間、
八幡之郷内新造立之在家宅間、
棟別以下郷次之御著給役、
被成御歎免之由所被仰出也、仍如件

天正八年庚辰

十一月十日 秋山紀伊守

奉之

圖音

（甲府市史史料編第一卷』716号文書）

本史料は、國音が郷隠が崎の「西之御館」で奉公を勤めた代償として、武田勝頼が郷次の著請役を免除したものであり、西曲輪を当時、「西之御館」と呼称していたことが分かる。また、天正3年（1575）武田勝頼朱印状（『甲府市史史料編第一卷』585号文書）に見える「御西」は武田信虎の側室で、西曲輪に居住したことから御西様と呼ばれたと伝えられている。

確証はないが、信玄嫡男の婚姻に当たって建設された西曲輪が、義信の死後、武田一家の夫人衆や、人質として武田氏館への居住が命じられた女性の住まいとして使用されたのではないだろうか。

第3節 北側樹形虎口

1 虎口空間（図2・写真2~3）

東西・南北約13mのほぼ正方形を呈した平場空間をもつ樹形虎口であり、北側の上橋接続部に1号門跡、南側の土塁対応部に2号門跡がある。虎口空間の機軸に対し、土橋と1号門跡は東寄りに、2号門跡は西寄りに設けられている。

第4・第7トレチの表土下5~10cmから厚さ約10cmの敷石状遺構が検出されており、虎口平場空間全体への広がりが想定される。敷石状遺構の中には長径25cm程度の大きさの整った自然石を並べた1号石列がある。西に面をもつこの石列は2号門跡の通路側石積と方位を同じくしていることなどから、同時期の遺構と考えられる。また、1号石列東側の敷石が径10~20cmと小さいのに比べ、西側の石積は径30cmを超すものが多く、礎石と目される径約50cmの扁平な石も3個検出された。

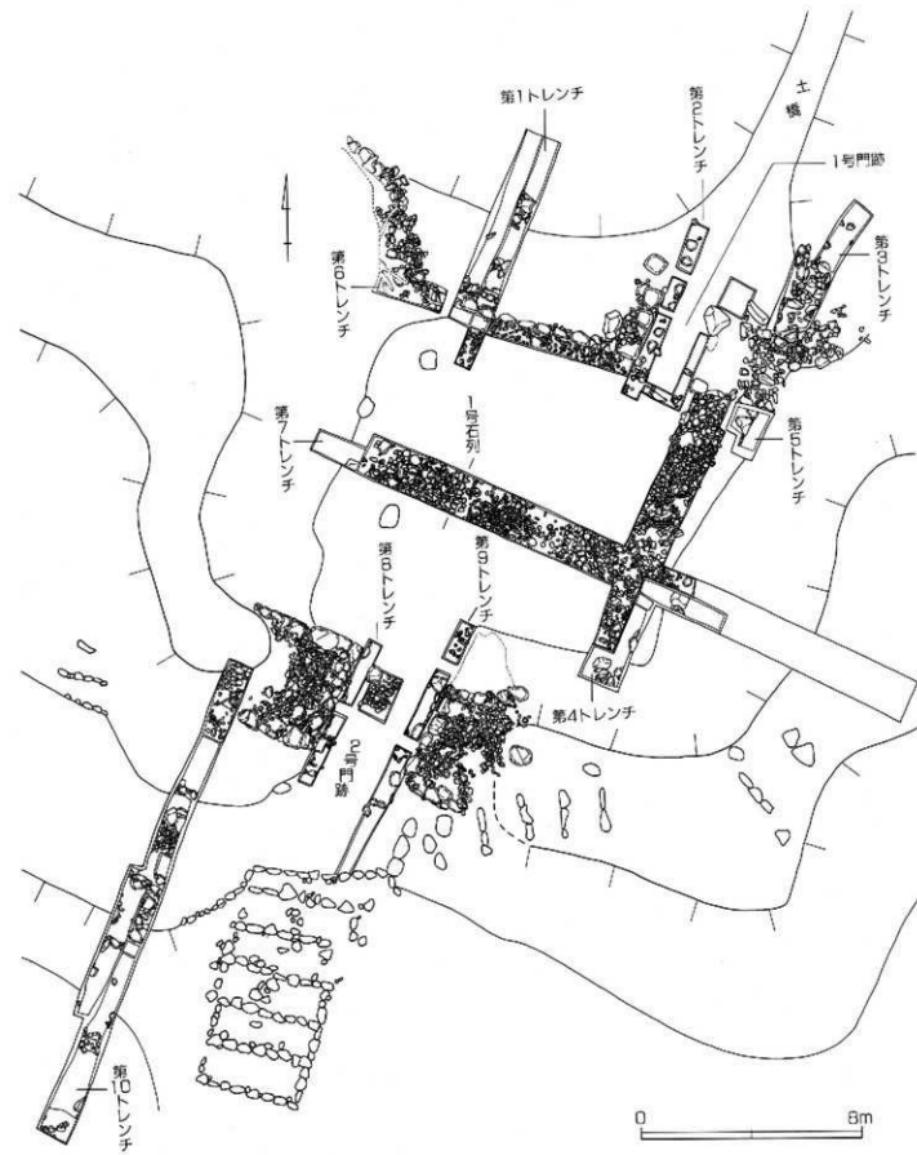


図2 西曲輪北側虎形虎口全体図

虎口空間をクランク状に取り巻く東・西の土星は、主郭部や西曲輪の外縁を囲繞する土星に比べて細く、2号門跡に近づくにつれて低くなっている。構形虎口東側の土星は上部が東西11m、南北12mほどの平坦面で、権台として捉えられている。

2 門 跡

(1) 1号門跡 (図3・写真3~4、7~9)

西曲輪北側土橋の手前に、2段に積んだ石積を両側に配した幅220cmの門跡が残る。1号門跡東側の石積は木の成長により破壊が著しいが、東側土星に向かって南・北を縁どる石列が延び、上部を疊で覆っている。現状では周囲より一段高い程度であるが、かつては数段に積んだ

石基が構築されていたものと思われる。

これに対し、門跡西側の石積は、西側土星に延びる石列によって南側を曲げており、その背後は虎口空間に比べ約30cmのレベル差をもつた低平な土星となっている。第1トレントセクション(図4)の観察から、①平らな整地上星を全く設けない時期、②塹側に偏って礎石を混入した幅約260cmの小土星を設定した時期、③小土星を南に約1m拡幅し、南側に3段の石積を施した時期、④さらに南側に拡幅し、長径約60cmの比較的大きな石を縁石とした時期、の4時期の変遷が想定される。虎口平場空間の敷石状造構は最終時期の④に伴うことが明らかである。また、②③は時期差をもたない可能性もある。

なお、1号門跡通路下層から、西側石積に沿って礎石列が検出された。礎石は径約40cmで、6個が南北に連な

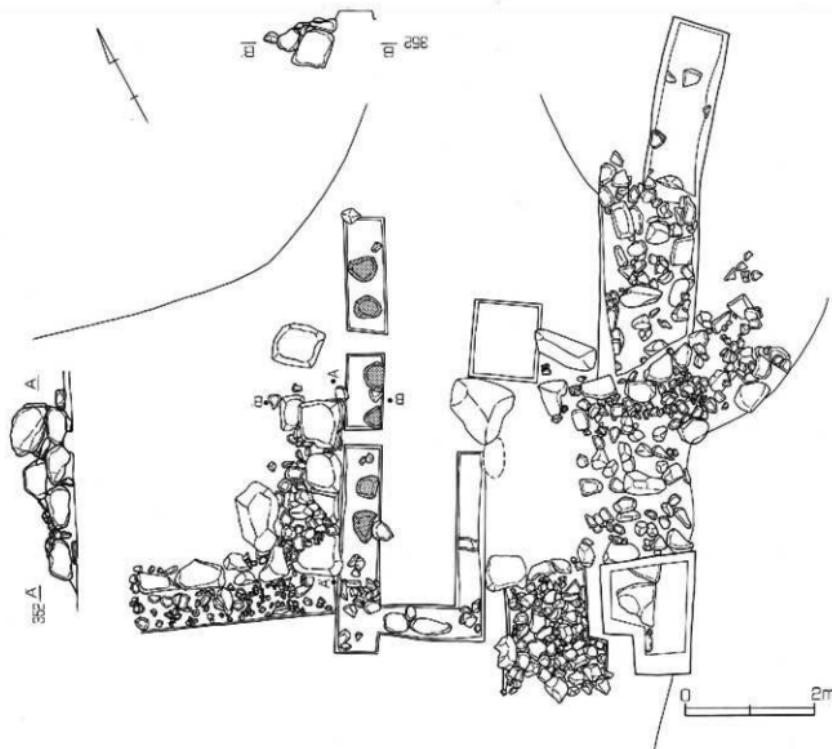


図3 1号門跡(スクリートーン=礎石)

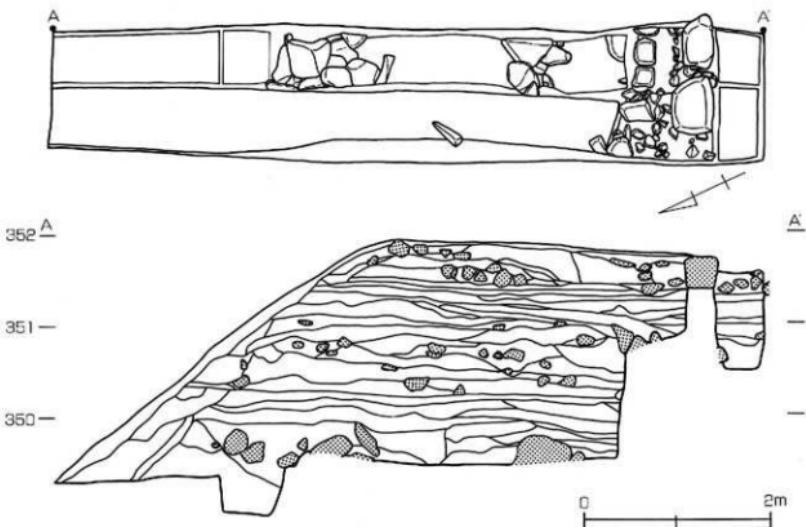


図4 第1トレント平面上図・セクション

っている。柱間は南側より60cm、105cm、65cm、105cm、60cmを測り同時期と考えられるが、南側3個の軸線に対し北側3個の礎石列は13度西に触れている。これらの礎石の上面が1号門跡通路両側の石積構築面から約20cm下部に位置することから、両者は時期の異なる造詣と判断される。通路東側石積の下層にも礎石列があるかサブトレントを設定して確認したが、検出されなかった。

(2) 2号門跡 (図5~6・写真5~6、13~17)

南側の土塁対応部に設けられた2号門跡は、東・西土塁の先端部分を細く整形し、それぞれの3面に石積を施している。通路幅は3.2mを測り、西曲輪南側樹形虎口の3.8mに比べ狭い。通路側の根石はほぼ水平に並べられているが、北面と南面は土塁を斜めにカットし、その上部に石積を築き、内部に裏込石を充填している。

2号門跡の石積の特徴は、石積全体の安定より、石材の最も平坦な面を表に出すことを優先させている点である。その結果、西曲輪南側樹形虎口の石積技法と同じく、扁平な石を立てて使用している。

東側土塁の石積は、北面2.7m、西面4.1m、南面2.5m

が残存する。北面は上砂の堆積のため側面図の作成はできなかったが、最も高い石の上面まで、1.8mを測る。東側の2個の石は原位置から動いていることが明らかである。通路に沿った南面は、長径60~80cmのやや扁平な石3個を立てて使用している。残存部の高さは0.8mである。南面の石も損壊しているが、石積最上面まで1.5mを測る。

西側土塁の石積は、北面4.1m、東面4.2m、南面3.1mが残存する。残存部の高さは北面2.4m、東面1.1m、南面2.4mである。

東側・西側土塁の通路に面した石積の直下からは、径45~60cmの扁平な礎石3個ずつが検出されている。柱間は全て1.8mで、径30cm前後の地覆石を礎石の間に並べている。礎石を用いて構築した門を取り壊し、対応する土塁の先端を石積によって再整備し、ほぼ同規模の門に造り替えたものであるが、上部の石積に対し、礎石列は4度西にずれている。

なお、第4トレント南端の土塁断ち割り部セクション(図7)では、最終期より一段階古い土塁の表面を被覆していた厚さ10~20cmの暗褐色粘土層の急激な落ち込み

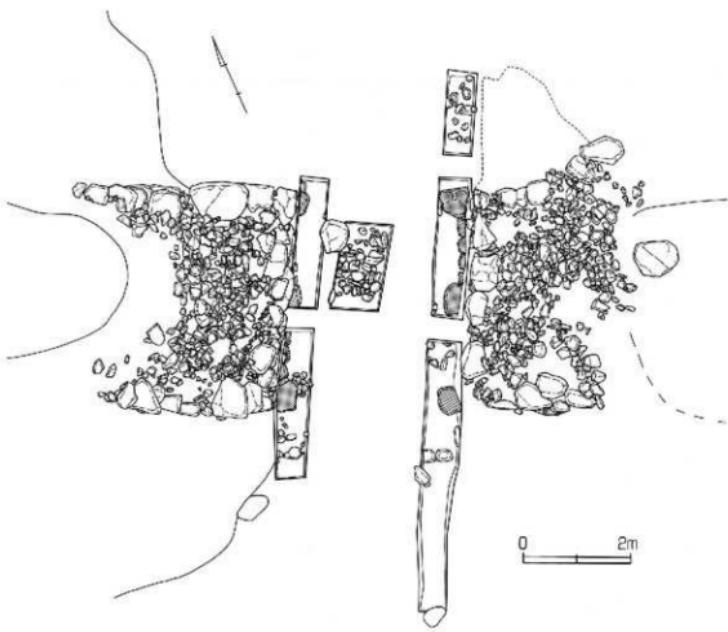


図5 2号門跡平面図

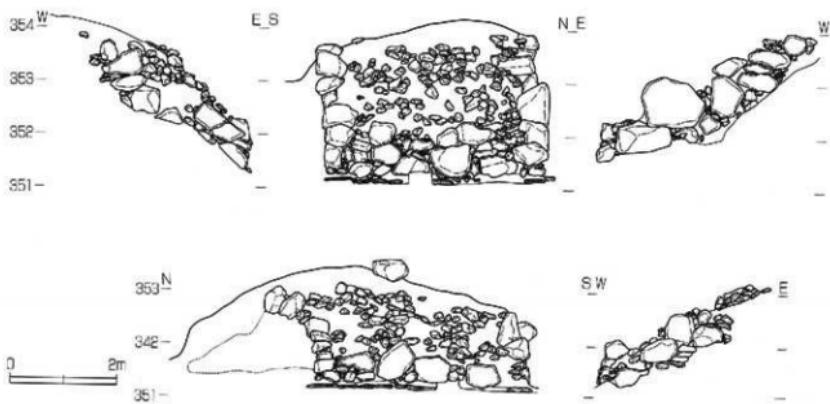


図6 (上段)2号門跡西側石積側面図、(下段)同東側石積側面図 (スクリートーン=礎石・地覆石)

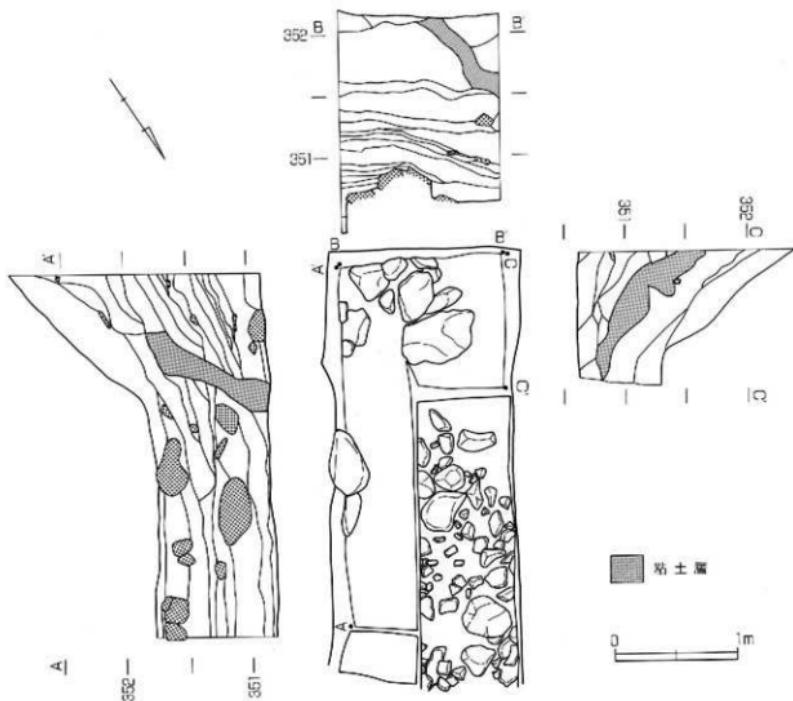


図7 第4トレンチ平面図・セクション

が観察され、この辺りで2号門跡東側の土塁が途切れていた時期があることが判明した。このことから、当初は土橋からまっすぐにに入る形態の構造虎口であったが、2号門跡東側の土塁を西に延長し、位置をずらしたものと推定される。改築当初は対応する土塁の間に礎石を使った門を構えていたが、さらに土塁先端に石積を施し、堅固な虎口に整備し直したのであろう。

3 下層造構

(1) 第1・第3トレンチ (図4、8、9・写真11、20)

高さ20~30cmの低平な土塁の下部に、厚さ約2mの整地上層が水平に堆積している。この中に掘き固めを考えられる粘土層が数層あるが、生活面であったか否

かを確認することはできなかった。

(2) 第5トレンチ (図8・写真21)

石積下面から1.5m掘り下げたところで、東に面をもつた石列が検出された。

石列の前面は落ち込んでおり、溝が存在した可能性がある。落ち込みの覆土から大窓I期の瀬戸・美濃系陶器(図10-10)が出土していることから、西曲輪造営以前の造構と判断される。

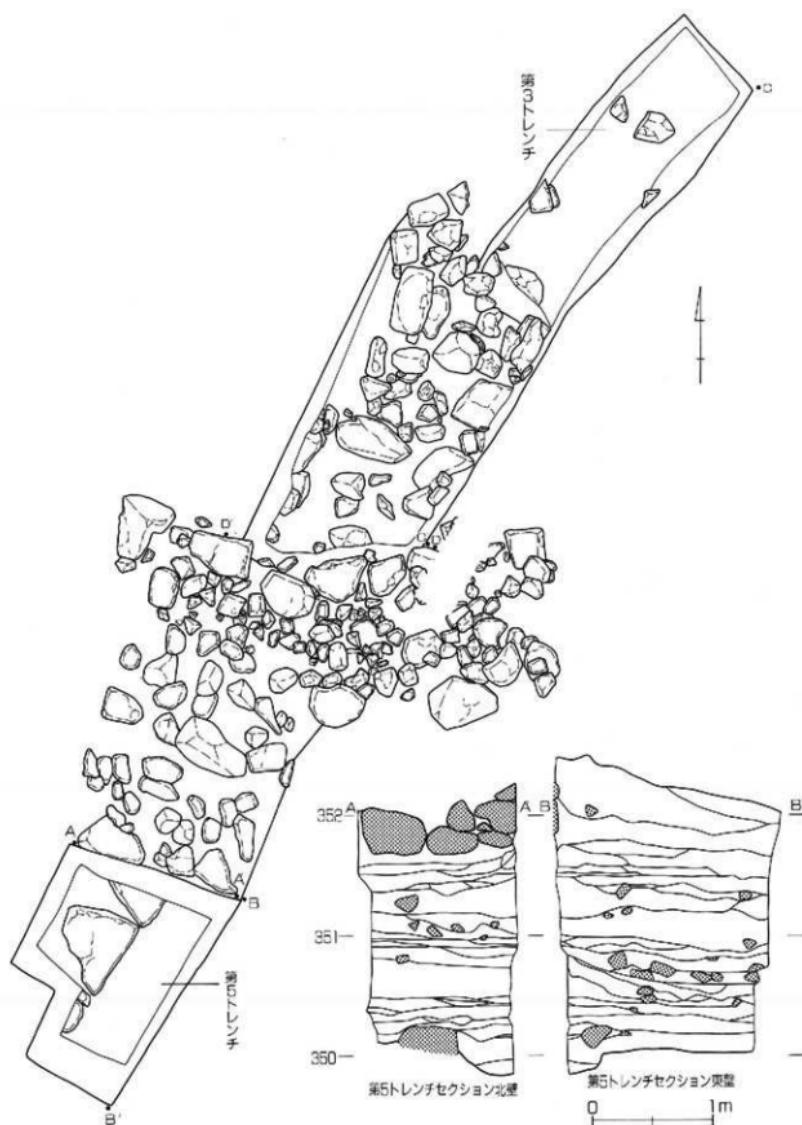


図8 第3・第5トレンチ平面図、第5トレンチセクション

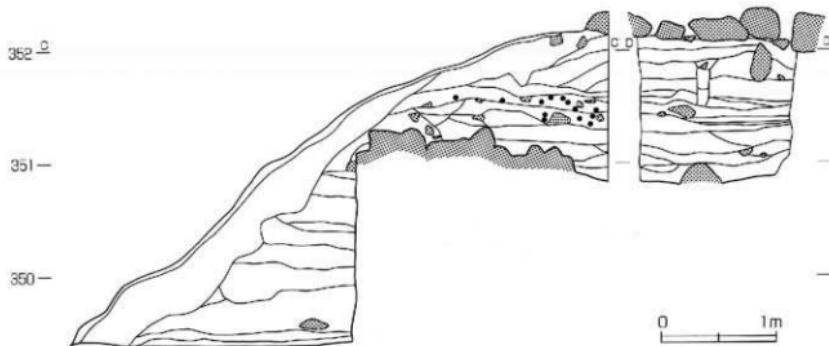


図9 第3トレンチセクション (●=焼土塊)

4 出土遺物 (図10・写真34~35)

土器・陶磁器・金属製品・漆器製品・焼土塊が出土しているが、焼土塊を除く遺物は極めて少ない。このことは居住空間とは異なる虎口の機能・性格を端的に示している。

かわらけ (図10-1~6)

いずれも小片で、胎土は粗く、厚手である。底部には回転糸切り痕が残る。

陶器 (図10-10-11)

10~11は瀬戸・美濃系の施釉陶器で、第5トレンチ出土の10は大窯I期の所産である。

中國製磁器 (図10-12)

16世紀代の白磁の菊皿1点のみであり、第3トレンチ下層より出土している。

金属製品 (図10-13~14)

14は銅錢であるが、文字の判読はできない。13は縦30mm、横7mm、厚さ1mm弱の銅製品である。径1mmの穴が穿けられている。

漆製品 (図10-15)

第5トレンチ石列周辺の焼土層から大窯I期の皿の小片とともに出土した。ほぼ3cm四方あり周辺の2mmほど立ち上った部分には金箔が施されている。また立ち上がり部分には径1mmほどの孔が2個ずつ、それぞれ4隅に外側から内側に向かって穿けられている。馬用鎧の装飾に用いられたものと推定される。

焼土塊

何れも火を受け赤褐色に変色している。中にスサに用いた藁の圧痕が残ること、及び平坦な面をもつものがあることから、壁土と考えられる。2号門跡から虎口空間の西半にかけて焼土塊が多数出土しており、土壁を用いた構造物の存在が推定される。

第4節 中段平場

1 石列・石積

1号石列 (図11)

第12トレンチに対し南北に直行し、地表下約10cm程度のレベルで検出されている。石は小さなものを用いているが、石列は調査区外に展開していることが予測される。面は東西いずれにあるか明確ではなく、性格も不明である。

1号石積・2号石積

1号石積は、1号石列から第12トレンチ内を東西に横断し、検出された部分だけでも18.4mを測る。第12トレンチ内に4か所サブトレンチを入れた結果、東側・中央で2~3段、西側で5~6段積んでいる状況が確認された (図11・写真26~27)。石積の段数が異なるのは、地山が西へ下っているため、石積で高さを調節して構築したためと考えられる。

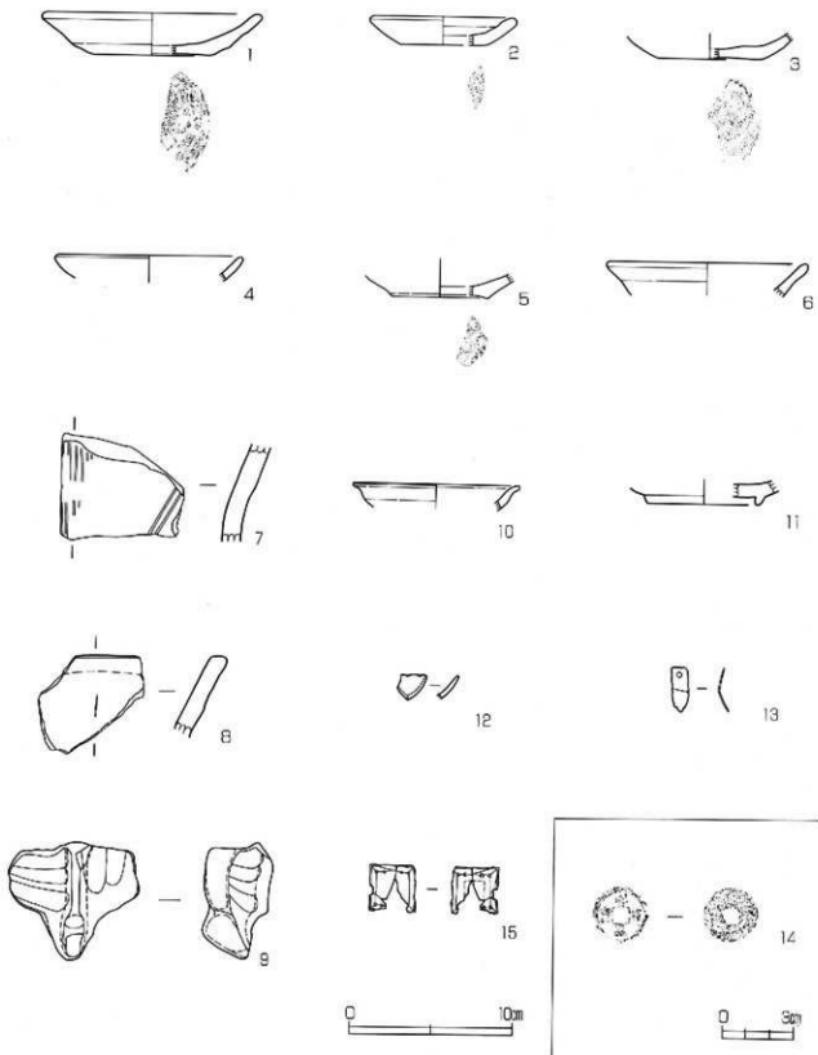


图10 北侧虎形口出土遗物

石の積み方は乱雑で、裏込の薬石等は使用していない。小さな石を無加工で積んでいるが、表面の面積が極めて小さい長細い石を奥行きをとって積み上げている。裏込なしでも根石になる石には、上部に比べ大きな石を用いている。両側に面をもつ。

2号石積は第11トレンチから第13トレンチにかけて検出されたが、第11トレンチ内では2段、第13トレンチ内では4段検出されている(図12)。非常に小さな石を積んでおり、特に石を選択もしろくは加工するようなことは行っていない。積み方は1号石積と大差はないが、やや1号石積に比べ奥行きがない。北側に面をもつ。

この2つの石積列は対応関係にあり、10層を超える緻密な掘き組みを行っていることから、土を積み上げる過程の上留めとして積まれていたことは明らかで、「上墨状構造物の核」「築地構築過程の痕跡」あるいは「通路状遺構」と考えられる。第13トレンチ断面内の上層に掘り込みを確認しているが、部分的な検出であるため、全容は不明である。1号石積と2号石積の間隔は、石の端から端までで220~230cm、内側で170~180cmを測り、1間幅を意識して構築されたものと推定される。

3号石積(写真32)

3号石積は第11トレンチ南側で検出された。上部を削平されると考えられるが、小さな石をところにより2段に積み、両側に面をもつ。構造的には稚拙な積み方であるが、奥行きを長くとっている点では、1号・2号石積と同様である。しかし、石積としての要素より石列としての要素が強い。性格は、土留めと考えられるが、建物に付随する縁石あるいは建物基礎の可能性も推測される。1号石列南から3号石列北までの距離は440~450cm(約2間半)を測る。

2溝跡

1号溝跡・2号溝跡

1号・2号溝跡は、第12トレンチ東側で交差する形で検出されている。布振りで地山を浅く掘り込み、検出面での幅約60cm、深さ約20cmで、平面形はやや歪み不整形である。性格は不明であるが、比較的古い段階に位置づけられる遺構である。

3号溝跡(図13・写真31)

第10トレンチ内中段平場と北側樹形虎口とを結ぶ斜面の基底部から検出された。幅約5m、深さは底部を検出し

ていないものの、確認した範囲で1.2mである。全容が不明であるため本概要報告では溝跡として扱うが、形状、規模等から推測して将来的に堰となる可能性が高い。

この構造からは、米、麦を主とする炭化物層が検出され、一部を洗浄したところ他にも小豆や大豆、蕎麦、胡桃等概ね10種類程度の炭化種子が採取された。炭化物層は中段平場側から人为的に投棄されているか、焼上塊、木炭等の存在、堆積状況から判断するかぎり、倉庫のような貯蔵施設が焼失したことによる火事場処理の一括魔除層と考えられる。これに伴い構築も廃絶したと考えられるが、中段平場との関連性は明確に捉えられなかった。今後の面的な調査に期待したい。

今回の調査では、炭化物層が厚く堆積し、かつ広範囲に展開していたため、それ以上深く掘削することは避け、炭化物層を保護するかたちで埋め戻した。

3 その他の遺構

他に集石を伴う遺構2基が検出されたが、調査区に制約され調査が困難であったことから今回は確認に止めた。よって、井戸等の遺構廃絶時の投げ込みによるものであるのか、何らかの集石遺構であるかは性格を含め不明である。

なお、3号溝跡が検出された第10トレンチ内断面を観察したところ、水田跡と考えられる黄褐色の床土層と灰オリーブ色の耕作土層を確認している(図13)。水田面は1面のみで、比較的短期間の使用であったと推測される。水田の廃絶直後には厚さ5cm程度の整地層が形成されているが、整地層直上からは樹形虎口空間造成のため盛土がされ、一方で中段平場側は3号溝跡に切られ、平場空間造成のために削平を受けていることが判明した。しかし、この整地層が主郭部造成に伴い家屋敷等として周辺部を整地した痕跡なのか、西曲輪造成段階の整地層であるのかは、出土遺物等が皆無であるため判然としない。いずれにしても、西曲輪の増設に着手する天文20年(1551)以前に、この地で水田耕作が行われていたことは確かである。

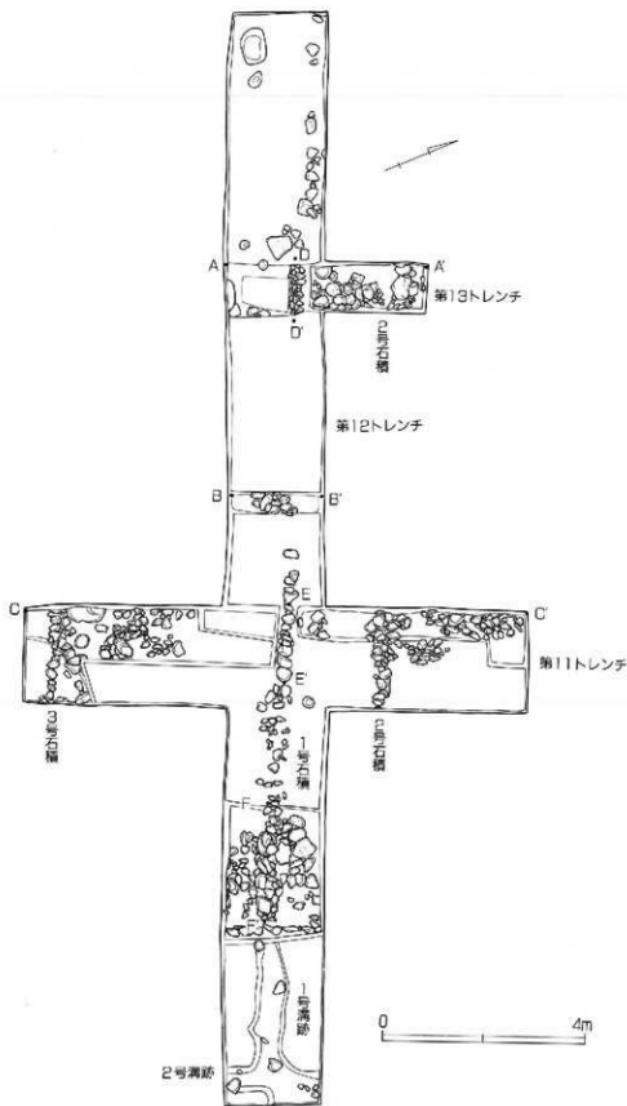
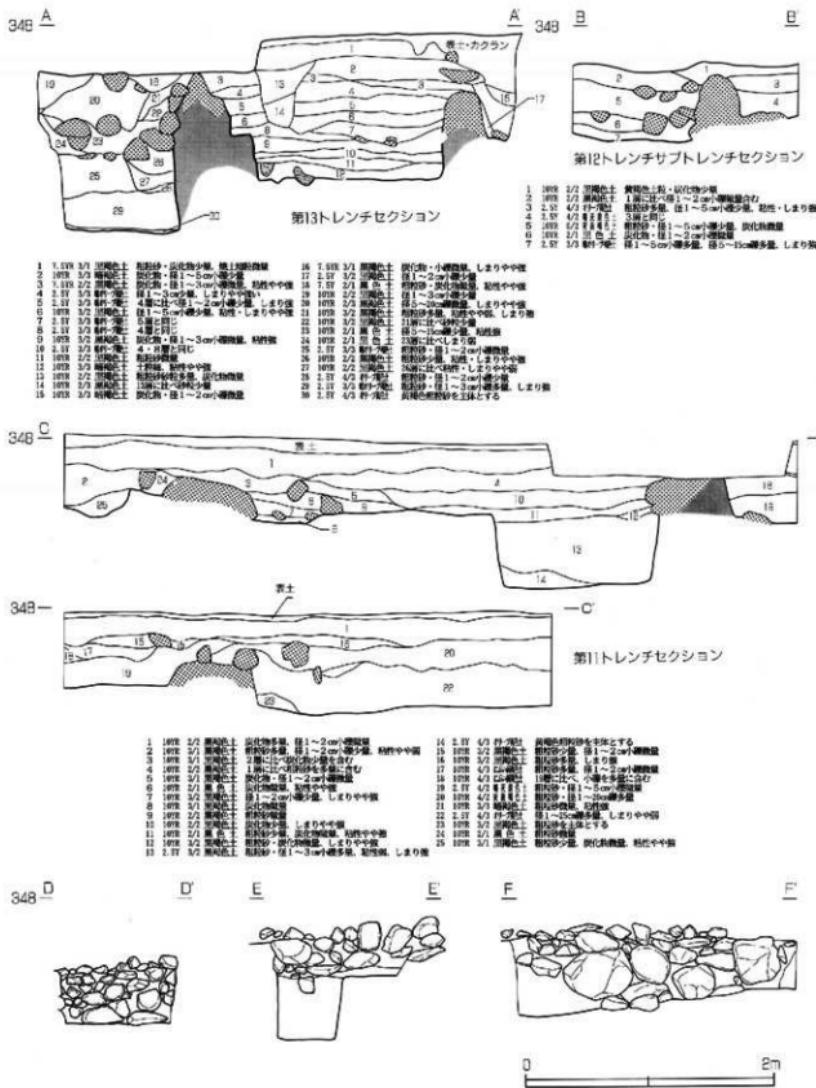


図11 中段 平場 全体図



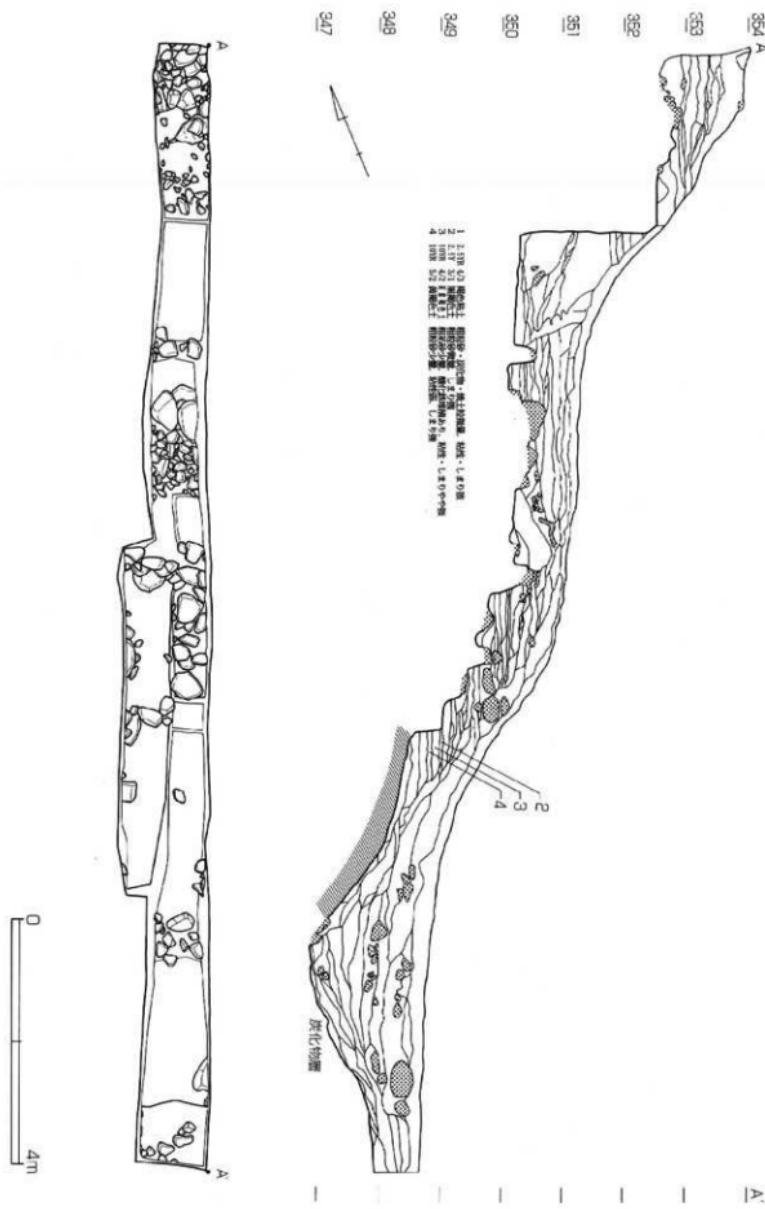


図13 第10トレーニング平面図・セクション

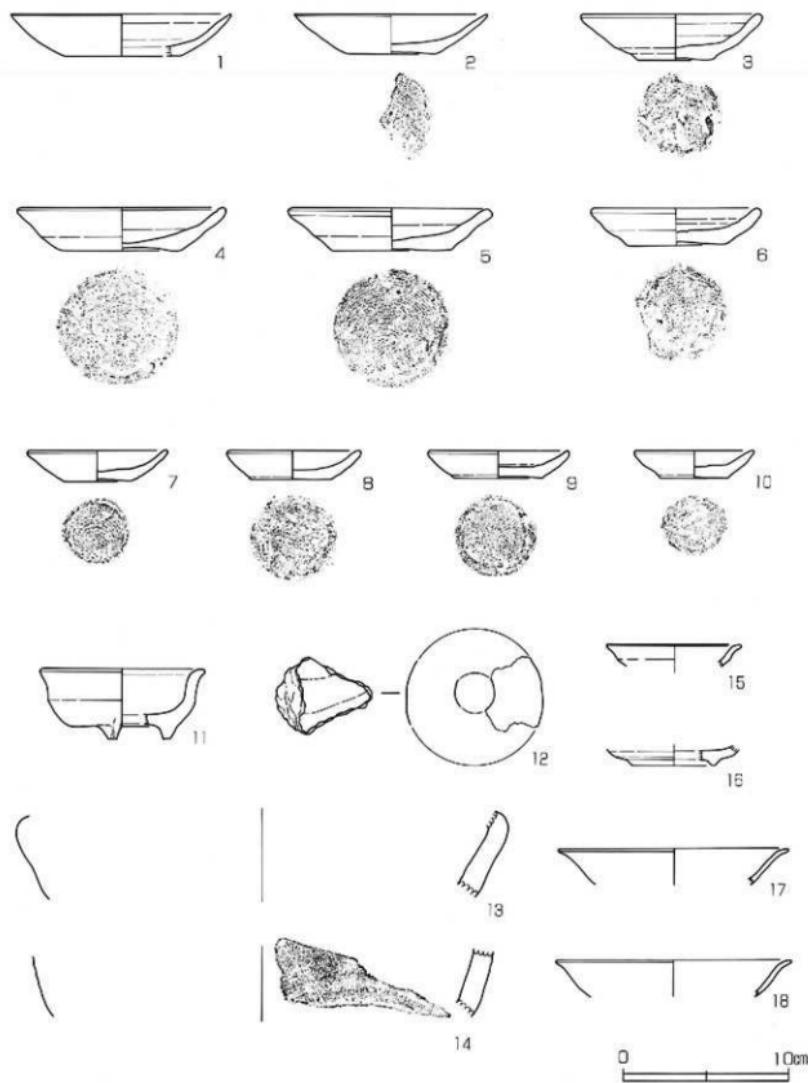


図14 中段平場出土遺物

4 出土遺物 (写真33)

出土した遺物は中世を主体とするが、調査面積も少なく、部分的な掘削に止めたこともあり数量は非常に少ない。主にかわらけ等の土器類が中心で、かわらけ1281点、その他上器類21点、陶磁器は中国製磁器7点・国産陶器8点で、合わせても僅か15点のみである。

かわらけ・その他の土器類 (図14-1~14)

かわらけは全体の9割を占め、すべてロクロ成形の皿である。胎土が精製され、胎壁の薄い灰白色系のものと、胎土が粗く器壁厚手とやや粗く器壁薄手の褐色系のものと3系統に大別できる。中でも、焼成が比較的良好な器壁の薄い1・2タイプのものが7割を占める。

他に土器類としては、内耳鉢、擂鉢、火鉢、三脚付香炉、轆の羽口等が出土しているが、いずれも小破片である。11の三脚付香炉は県内の中世遺跡からは何点か出土例はあるものの、当館跡からは初の出土となった。

陶磁器 (図14-15~18)

出土した陶磁器はいずれも小破片で、点数も極端に少なかった。中国製磁器は青磁碗2点、白磁端反皿2点、染付碗皿2点、青白磁1点のみである。国産陶器も瀬戸美濃灰釉皿6点、天目茶碗1点、擂鉢1点であるため、この曲輪内の傾向を捉えることは困難である。

(第1節・第4節佐々木満、第2節藤井祐仁、第3節志村憲一)

中段平場遺物観察表

(数値はセンチメートル)

報告番号	位置	種類	器種	法量	胎土	色調	焼成	備考
1	第11トレント	土器	かわらけ	口13.4 底7.0	雲母、石英多量、長石少量	7.5YR 8/6	良好	底部 回転糸切り 反転実測
2	第11トレント	土器	かわらけ	口11.5 底5.3	雲母、石英多量、長石少量	7.5YR 6/6	良好	底部 回転糸切り 反転実測
3	第12トレント	土器	かわらけ	口10.4 底4.6	長石、石英、雲母多量	7.5YR 7/6	良好	底部 回転糸切り 反転実測
4	3号清跡	土器	かわらけ	口12.2 底7.3	長石、石英、雲母多量	5YR 6/6	良好	底部 回転糸切り 完形
5	3号清跡	土器	かわらけ	口11.5 底7.1	雲母、石英多量、長石少量	5YR 5/2	良好	底部 回転糸切り
6	3号溝跡	土器	かわらけ	口10.3 底6.0	雲母、石英多量、長石微量	7.5YR 3/1	良好	底部 回転糸切り
7	第11トレント	土器	かわらけ	口8.3 底4.1	雲母、石英多量、長石少量	7.5YR 6/4	良	底部 回転糸切り
8	3号溝跡	土器	かわらけ	口7.6 底4.7	雲母、石英多量、長石少量	5YR 6/6	良好	底部 回転糸切り
9	第11トレント	土器	かわらけ	口8.5 底5.4	長石、石英、雲母多量	7.5YR 5/3	良好	底部 回転糸切り
10	第10トレント	土器	かわらけ	口7.2 底4.0	雲母、石英多量、長石微量	7.5YR 8/6	良	底部 回転糸切り 反転実測
11	第10トレント	土器	三脚付香炉	口9.7 底6.5	長石、石英多量	2.5YR 6/6	良好	反転実測
12	第10トレント	土器	轆の羽口	口2.4 外8.4	長石、石英多量、雲母少量	5YR 6/1	良好	ヘラ撫で 滅菌付着
13	第11トレント	土器	擂鉢		雲母、石英多量、長石少量	7.5YR 5/1	良好	反転実測
14	第10トレント	土器	擂鉢		雲母、石英多量、長石微量	5YR 6/6	良好	刷目アリ 反転実測
15	第11トレント	国産陶器	灰釉皿	口8.0	密		良好	反転実測
16	第12トレント	国産陶器	灰釉皿	底5.0			良好	反転実測
17	第13トレント	中国磁器	白磁碗	口14.0	緻密		良好	反転実測
18	第12トレント	中国磁器	白磁碗	口14.4	緻密		良好	反転実測

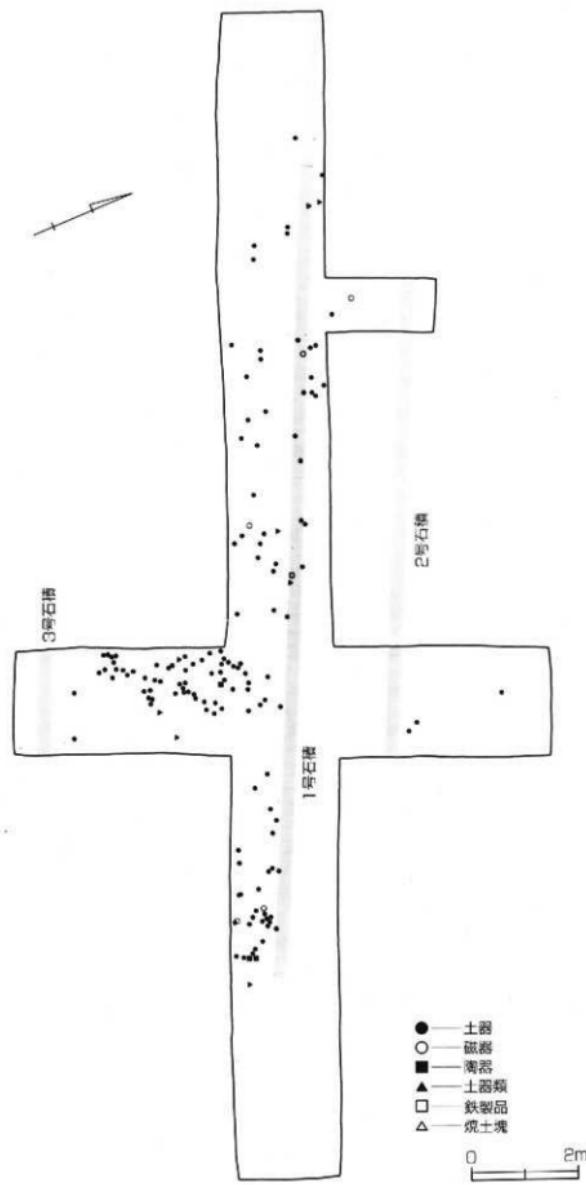


図15 中段平場遺物分布図



写真1 北側樹形虎口(調査前)



写真2 北側樹形虎口全景



写真3 1号門跡



写真4 1号門跡



写真5 敷石・2号門跡



写真6 2号門跡



写真7 1号門跡下層礎石列



写真8 1号門跡東側石積



写真9 1号門跡西側石積



写真10 土壘際の集石



写真11 第1トレンチセクション



写真12 第1トレンチ検出石列



写真13 東側石積



写真14 東側石積下層の礎石・地覆石



写真15 西側石積



写真16 西側石積北面

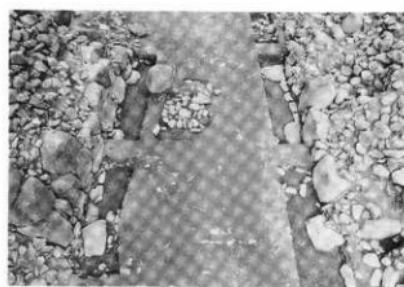


写真17 2号門跡

西曲輪北側虎口2号門跡



写真18 第4トレーナー南壁セクション



写真19 第4トレーナー東壁セクション



写真20 第3トレーナー全景



写真21 第5トレーナー内石列



写真22 1号門跡西側土基際石積



写真23 1号石列



写真24 調査前



写真25 調査区全景



写真26 1号石積東側



写真27 1号石積西側



写真28 1・2号石積

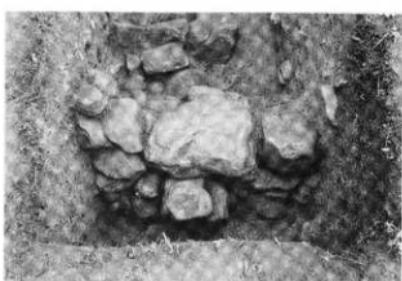


写真29 13号トレンチ内2号石積

西曲輪中段平場



写真30 第13トレンチセクション

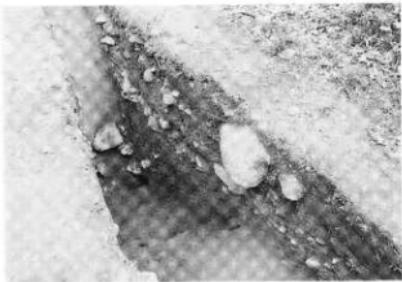


写真31 3号溝跡



写真32 1・2・3号石積検出状況

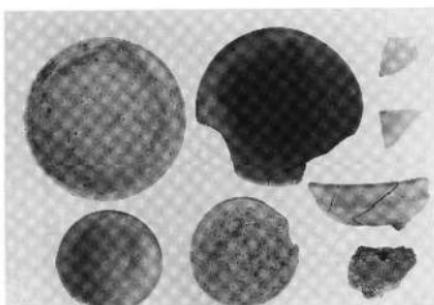


写真33 中段平場出土遺物

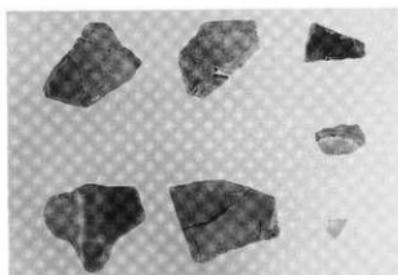


写真34 北側虎形虎口出土遺物
(かわらけ・土製品・陶器・白磁)

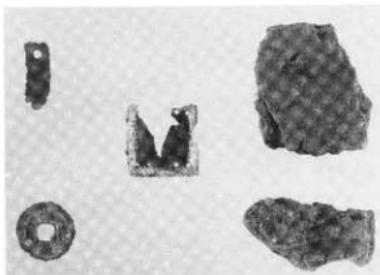


写真35 北側虎形虎口出土遺物
(銅製品・漆製品・焼土塊)

第2章 石積測量調査

第1節 調査の概要

武田氏館跡では、現在、天守台や主郭部北・東・西各土壠、西曲輪南・北虎口等において比較的堅固な石積の存在を確認できる。近世に描かれた各種絵図には、主郭部内部を区画する石垣や石積を用いた馬出土塁も描かれているが、開発や武田神社の創建などで失われてしまつた。また、これまでの調査の結果、味噌曲輪や主郭部の土塁基底部、あるいは塙に面した土塁の水際でも数段の石積が検出されている（『史跡武田氏館跡』）及び本報告書第3章参照）。

従来、武田氏が築いた城郭では、土塁基底部や虎口の

一部に3～5段程度の石積が用いられる程度と考えられてきたが、東京都八王子城や群馬県太田金山城の調査で北条氏の時代の構築が明らかな堅固な石積が確認されるようになり、武田氏館跡の石積についても早急に資料化を図り、築造時期の検討を行う必要が指摘されるようになった。そこで、平成9年度は、立木のため同化困難な天守台と後世の積替えが顕著である主郭部北側斜形虎口を除き、現状で確認し得る主な石積の実測を実施した。

なお、石積は崩落の危険性があるため基底部までの発掘調査は行わず、地表面に現れている部分の草や枯れ葉等を除去し、側面図・エレベーション図と一部の平面図を作成した。土橋（3か所・5面）と西曲輪北東部塙法面の石積側面図・エレベーション図は、株式会社シン技術コンサルに委託して作成したものである。

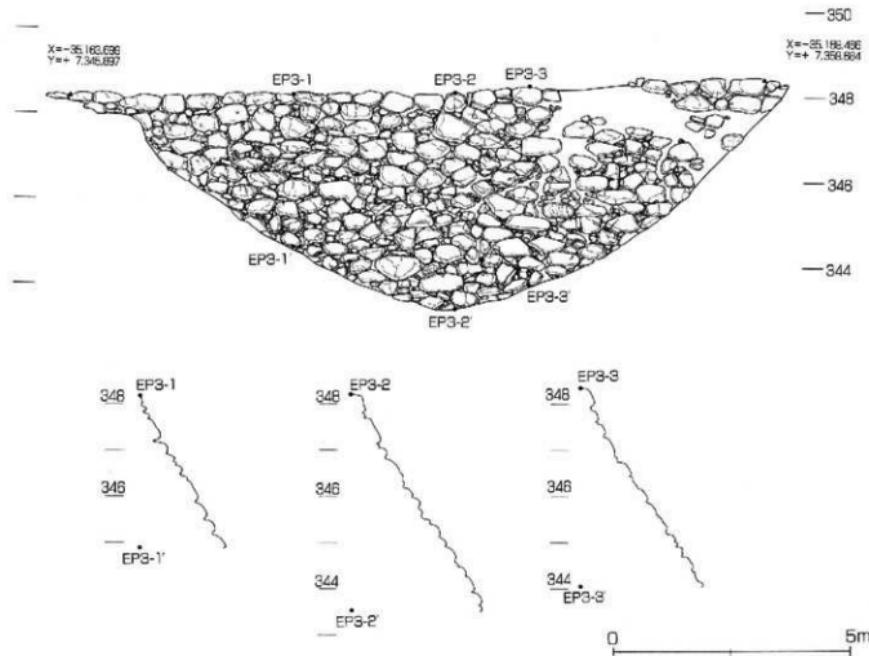


図16 主郭部大手土橋南面石積側面図・エレベーション

第2節 石積測量調査

1 主郭部大手土橋

主郭部東側の大手門前方に築かれた土橋で、僅かに主郭部側に傾斜している。長さ約16m、幅8mを測り、土橋南面(図16、写真36)と北面(図17、写真37)には、構築方法の異なる石積が築かれている。

南面石積は、長さ16m、最大高4.7m。東側上部には桟の太い根が張り出し、一部の石積を覆い隠している。石材は長径40~80cmの安山岩の自然石であり、詰め石には径10~30cm程度のものが用いられている。人为的な割石や加工を施した石を使用していない点は武田氏館跡の全ての石積に共通する。また、堤底を水平に整地せず、半円形に掘り下げた地山の上面に直接裏込を施した石積を築く手法も、他の土橋石積と共通する。

南面石積の特徴は、天守台の南面・東面石積と同様、

大きさがある程度揃った石を選び、一段で高く積み上げている点である。石の露出面は比較的平らで、法面全体が滑らかに見える。大手土橋南面と天守台南面・東面の石積は館で最も目につく場所であり、装飾効果にねらいが置かれたものと考えられる。勾配は57~59度であるが、上部は反って約65度となる。北面石積が上下2段で構築されていることから、天守台の築造時期に大手土橋の南面石積を積み直した可能性がある。

北面石積は、長さ14.8m、最大高3.8m。東端は桟の根が張り出しているため、実測できなかった。石積みは上段の高さ約2.3m、下段約1.5mの2段築成で、段差部分は幅40~50cmの水平なテラスとなる。上段の勾配70~77度、下段60~65度を測る。一段の高さ2m程度の石積を僅か40~50cmの控えをとて段状に築く手法は、この時代では武田氏館跡土橋・西曲輪北東部堀法面の石積以外に佐賀県鳥栖市の勝尾城にみられるだけである。

石材の安山岩は長径40~120cmと不揃いであるが、下段

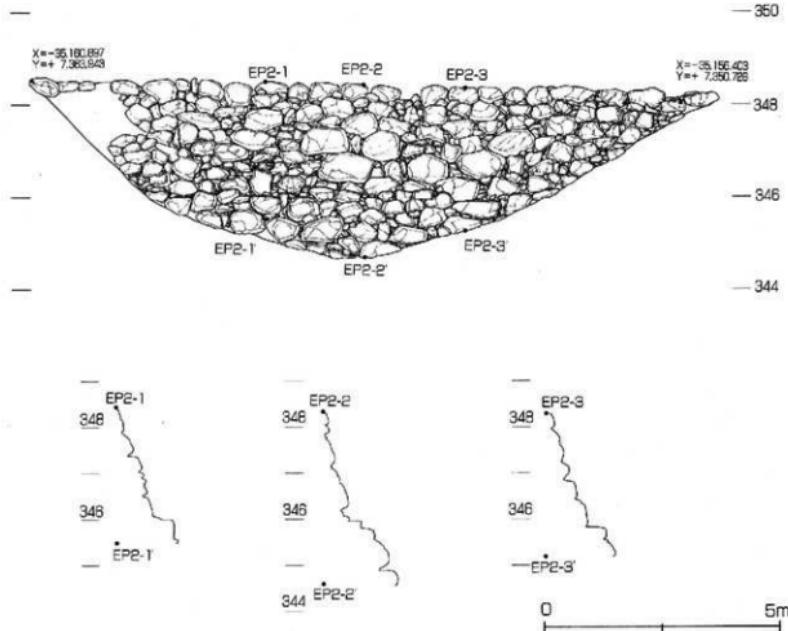


図17 主郭部大手土橋北面石積側面図・エレベーション

は比較的大きさが整っている。上段には幅約40cm・厚さ13cmの方形に加工された石材の転用が確認された。下面にノミによる加工痕が残るが、どのような石製品の部位なのか特定することはできなかった。

2 主郭部北側土橋

主郭部と御隱居曲輪を結ぶ位置に設けられた土橋である。土橋北側には堀と土塁（石壘）で開続された角馬出が存在したが、現在は堀の一部が残存するのみである。長さ約14m、幅6mで、石積は東面3段（図18、写真38）、西面2段（図18、写真39）の段状築成となっている。

東面石積は、現況長さ12.7m、高さ4.8mあり、上段は約2m、中段は2.4m、下段露出部分は0.4mを測る。石積の勾配は下段不明、中段66~68度、上段62~64度であり、中段より上段をやや緩やかに積んでいる。各段の控えは30~50cmである。石材は安山岩で、長径40~180cmの石材が使用されているが、70~80cmのものが多い。下段→中段→上段の順で使用石材が大きくなっているといえよう。なお、上段北端の小さな石を積んだ部分は、当初の石積ではなく、近世以降の補修と考えられる。

西面の石積は、長さ14m、高さ4mの規模で、上段の高さ1.6m、下段2.4mを測る。段差部には奥行き30~50cmの控えがとられている。控えのテラスに沿って中央付近から南に延びる空白部は、樹木の太い根により実測できなかった部分であり、北側の間際は石積の崩落によるものである。

石積は下段70度、上段55~66度の勾配であり、東面と同様、上段の傾斜が緩やかとなる。上段に大きな石が目立つが、多くは長径40~90cmの自然石である。

3 主郭部西側土橋

主郭部と西曲輪の間に築かれた土橋である。味噌曲輪や御隱居曲輪の堀から流れる水の多くが主郭部背後の堀底をとおってこの土橋に至り、暗渠を通して主郭部南側の笠堀に集められている。そのため、北面石積の下部が堆積した土砂で覆われているのに加え、南面はほぼ全面にわたり崩落し、幅を狭めて積み替えられている。土橋上面は西曲輪に向かってやや傾斜している。長さ約13m、幅6mで、北面（図19、写真40）、南面（写真41）ともに2段の石積が築かれている。

北面の石積は、長さ17m、上砂堆積面からの高さ3mを測る。上段の勾配は66~69度で、段状築成をした他の

土橋の上段に比べ、強い傾斜となっている。上段と下段の控えは30~50cmで、上段の高さは2.4mである。下段の石積には崩落箇所や前面に大きくせり出した石も見受けられる。他の土橋法面に比べ、長径80~130cm程度の大きな石を多用している点も特徴的である。

南面の石積は、西端の一部約1.5mが残っている。残存部の高さは約3mであり、2段構造をもつ。上段の高さは2.3m、下段約0.7mを測る。

4 西曲輪北東部堀法面

主郭部に面した西曲輪北東部堀法面の下部から中央にかけて、3段に構築された石積が残存する（図20、写真42）。全体的に崩落が進んでおり、薄い裏込めが露出している。石積残存部の幅は約12m、高さ約4mを測る。

上段の残存高は1.5mで、3~4段に積まれている。中段は中央部4.3mが崩落しているが、北側に3m、南側は3.8mが残る。高さは1.5mあり、3~5段積まれている。下段は長さ約8m、露出面の高さ1mほどである。法面の歪みが著しいが、上段65~70度、中段57~64度、下段65度の勾配と推定される。各段の控えは30~50cmである。石材の大きさはある程度揃えられており、長径40~80cmのものが多い。

第1章第2節で述べたように、法面の上部が西曲輪北側虎口に隣接する櫓台として利用されていた可能性が高く、ここに施された石積はその法面の補強を目的としたものと推定される。なお、法面上部に見える3~4段の石積と北端最下部の雜然とした石積は近世以降の所産である（写真43）。

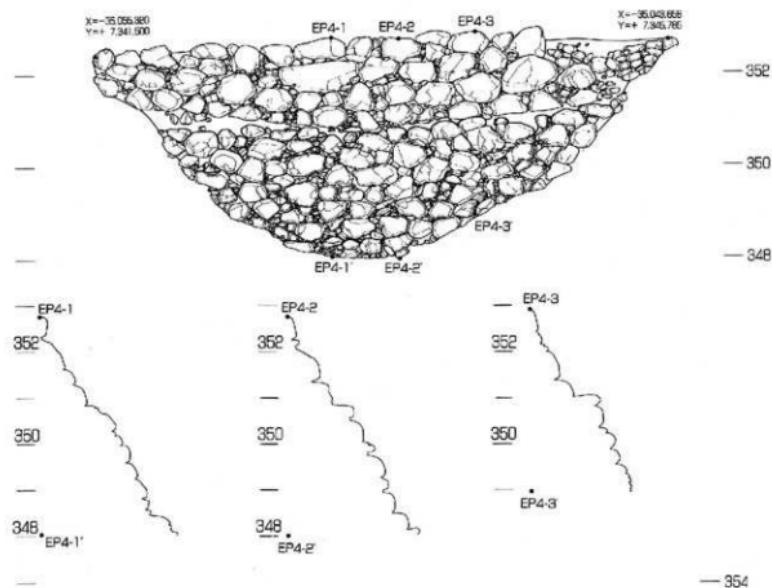
5 主郭部大手虎口

大手虎口は主郭部の東側に位置する。虎口南・北両側の土塁基底部には、安山岩を主体とし一部に花崗岩を用いた1~4段の石積が残っている。土橋や天守台の石積に比べ、詰め石は少ない。

南側の石積（図21、写真44）は、長さ約6.4mを測る。虎口の幅は最大7.5mであるが、東側から5.7m入ったところでこの石積がクランク状に内側に折れ曲がり、5.8mの幅員となる。樹木の成長・倒壊や根の影響による崩壊が著しく、裏込め石が露出した状態である。現在残る石積は1~2段で、最大高約1.4mである。

北側の石積（図21、写真45）は、長さ16.4m、最大高1.6mを測る。石は3~4段に積まれている。

— 354



— 354

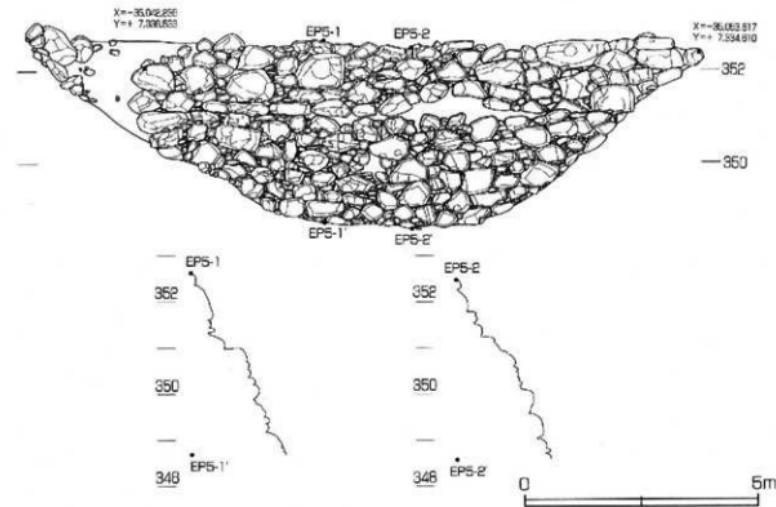


図18 主郭部北側土橋石積側面図・エレベーション(上段=東面、下段=西面)

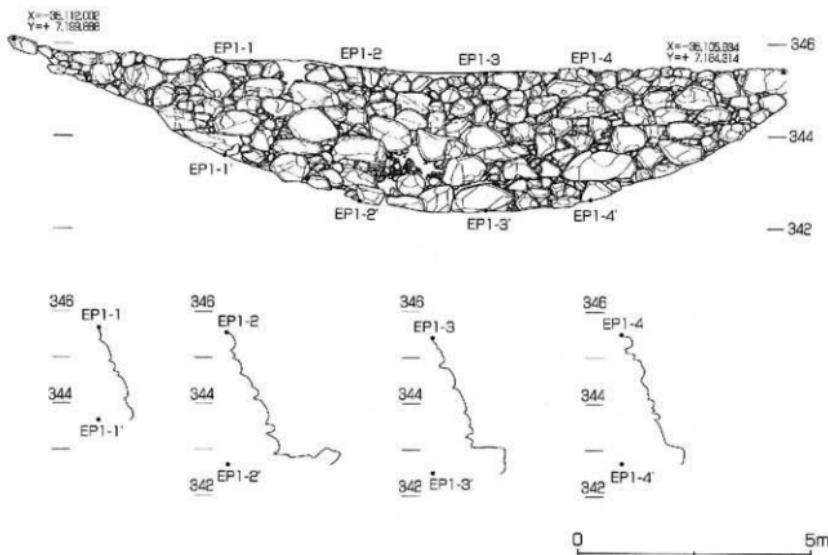


図19 主郭部西側土橋北面石積側面図・エレベーション

南・北両石積ともほぼ垂直に積んでいることなどから、築造時の石積はさほど高くなかったものと推定される。長径1mを超える大きな石を並んで積んでいますが、西曲輪南・北側樹形虎口と異なり、細長い石を横に積んで安定させている。

なお、大手虎口にはかつて数個の礎石が露出していたと伝えられるが、今回の調査では南側の石積に平行して1間隔間に並ぶ2個の礎石を確認するにとどまった。武田氏館跡で検出された礎石の中では最も大きく、径0.9~1mである。礎石周辺からは焼土塊2点が検出されている。

6 主郭部西側虎口

この虎口は幅5.7mを測り、西側へ傾斜している。虎口両側の石積は2~4段に積まれ、上部が前方にせり出している部分もあるが、当初はほぼ垂直に立ち上がっていたものと推定される。土橋・天守台に比べ、詰め石は少ない。

南側の石積（図21、写真46）は、長さ15m、高さ0.7~

1.5mで、長径30~90cmの安山岩を用いている。一部に花崗岩も見られる。

北側の石積（図21、写真47）は、長さ約14m、高さ0.3~1.2mで、長径40~120cmの石材を使用している。石積の西半には長径50~70cm、厚さ20cm程度の石材が多用され、大手虎口北側石積と似た外観を呈している。

7 西曲輪南側樹形虎口

樹木の影響などで崩落しているが、幅3.8mの虎口を形成する両脇の土塁先端部に数段の石積が残る。土橋や天守台・主郭部大手虎口・北側虎口・西側虎口と異なり、扁平で比較的大きな石を立てて積む技法が特徴的である。この技法は西曲輪北側樹形虎口にも確認できるが、用いた石材は南側樹形虎口の方が大きい。

東側の石積（図22・写真48）は土塁先端部の幅を狭め、北・西・南の3面を覆っている。土塁の先端部を斜めに整形してその上に積んでおり、内部に裏込石を充填している。通路に面した西面石積の下部には、この石積と若干方位をずらした1間隔の礎石列が露出している。礎石は

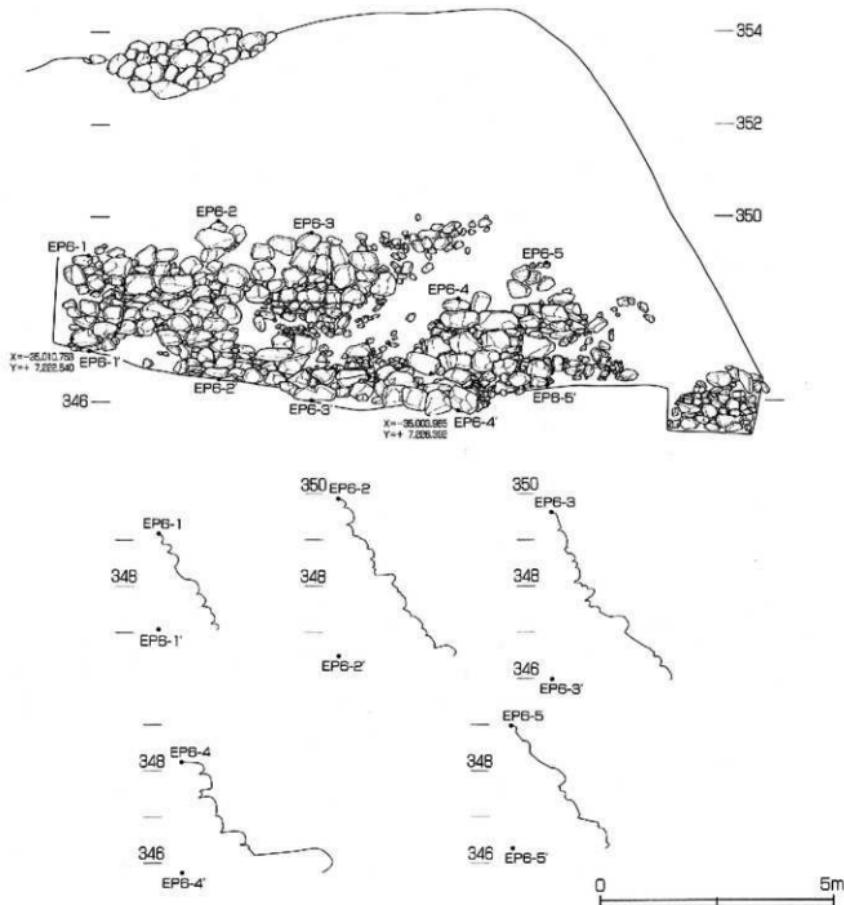


図20 西曲輪北東部堀法面石積側面図・エレベーション

3個で、厚さ約20cm、直径は70~80cmである。

3節を参照。

西側も東側の石積と同様な様方である(図22・写真49)

が、土砂の崩落や樹木の根のため、下部の石積を確認することはできなかった。

なお、西曲輪北側樹形虎口石積については、第1章第

8 その他の石積

平成9年度の石積調査のなかで、土塁内・外面の基底



大手虎口南側石積



大手虎口北側石積



主郭部西側虎口南側石積



主郭部西側虎口北側石積



図21 主郭部大手虎口・同西側虎口石積側面図

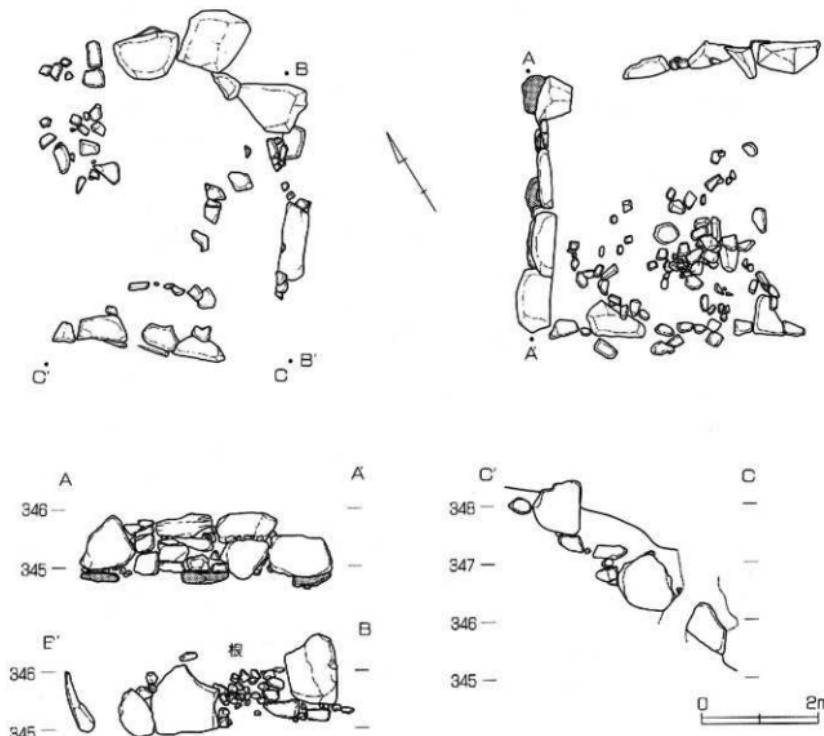


図22 西曲輪南側樹形虎口石積平面図・側面図（スクリーントーン＝礎石）

部に施された数段の石積列と、土壘や塙法面の一角に構築された連続性のない石積の存在が、武田氏館跡の特色としてクローズアップされている。

前者では、かねてより主郭部北側土壘の堤底に沿って延びる東西約50m、高さ0.5~1.8mの石積（写真51）が注目されていた。裏込を作うこの石積は径40~80cmの安山岩を若干の勾配をもたせて3~4段に積んでおり、西端に残るコーナーには「角石」を意識したと考えられる方形に近い大きな石を上部にのせている。こうした石積列は、主郭部東側土壘の堤底でも約20mにわたって検出された（写真52）。

後者は、主郭部東（写真55）・南側土壘の外縁や、主郭部北側土橋・西曲輪北側樹形虎口に近い空堀の北側法面

の一角に、スポット的に構築されている。空堀の法面に施された石積は崩落が進んでおり、裏込石と推定される小礫も周間に散乱している（写真54）。この種の石積はこれまでに7か所が確認されたが、構築目的は不明である。

（第1節・第2節3~6 志村憲一、第2節1・2、7・8 数野雅彦）



写真36 主郭部大手土橋南面石積



写真37 主郭部大手土橋北面石積



写真38 主郭部北側土橋東面石積



写真39 主郭部北側土橋西面石積



写真40 主郭部西側土橋北面石積



写真41 主郭部西側土橋南面石積



写真42 西曲輪北東部堀法面石積



写真43 西曲輪北東部北端最下部石積



写真44 大手虎口南側石積・礎石



写真45 大手虎口北側石積



写真46 主郭部西側虎口南側石積



写真47 主郭部西側虎口北側石積



写真48 西曲輪南側桟形虎口東側石積



写真49 西曲輪南側桟形虎口西側石積



写真50 西曲輪南側樹形虎口西側土塁上面石積



写真51 主郭部北側土塁底石積



写真52 主郭部東側土塁底石積



写真53 西曲輪北西隅土塁法面石積



写真54 西曲輪北側土塁東、空堀北側法面石積



写真55 主郭部大手土橋北側土塁法面石積

第3章 笠堀試掘調査

第1節 調査の概要

1 調査に至る経過

史跡武田氏館跡の主郭部・西曲輪の水堀（笠堀）は、館の南側に広がる耕地の灌漑用溜め池としても機能しており、堀の維持管理や水位の調整など、水に関する管理は相川土地改良区が行っている。

笠堀には泥や落葉が堀底に厚く堆積し、貯水能力がかなり低下していたのに加え、近年、ここから発生する悪臭が近隣住民や史跡見学者の不評を買うようになり、堀水の浄化を求める声が市に頻繁に寄せられた。

甲府市産業振興労働部農政課では、農業用水の確保と水質保全のため、堀浚渫工事の実施を決定した。工事に先立ち、文化庁記念物課・県教委学術文化財課・市教委文化芸術課で協議・検討をした結果、事前に試掘調査を実施して造構及び造物を含むする土層の深さを確認し、造構に影響のない範囲内で上面の泥を除去することになった。なお、試掘調査は史跡武田氏館跡整備基本構想・基本計画策定のための学术調査を兼ねている。

試掘調査とこれに続く簡易的な浚渫工事は、水田への水供給が不要となる晩秋から春先にかけて実施することになったが、試掘調査に時間要するため単年度で笠堀全体の浚渫を完了することはできず、3年計画となった。そのため、笠堀を3区分し、平成7年度は東側、8年度は中央部、9年度は残りの西側と順次進めていくことになった。

2 調査の概要

堀の試掘は、原則として幅2mのトレンチを堀の長軸に直交する形で設定した。浚渫を実施する堆積土の下部だけを調査対象とするのではなく、史跡整備計画の基礎データを得ることを目的に、石積が施されていた可能性のある土壌の立ち上がり部分まで調査することにした。トレンチは、調査順に東より第1から第31まで31本設定した。

各年度のトレンチ設定場所と調査方法は、史跡武田氏館跡整備活用委員会・同調査団会議で事前に協議・検討し、調査成果については隨時報告を行った。

平成7年度は、大手土橋から主郭部南側の武田神社太鼓橋（止間橋）までを調査対象とした。主郭部東側に1本、南側に2本、計3本のトレンチを設定し、162m²の調査を行った。調査期間は平成7年12月6日から同8年3月28日である。その結果、堀底までの堆積土のうち約半分が腐葉土と落葉であること、堀の形状が地点によって異なること、第3トレンチで堀の下部に石積が存在することなどが確認された。

平成8年度は、主郭部南側の止間橋から西曲輪南側の出入口に架かる橋までを調査した。第4トレンチから第15トレンチまで12本の調査区を設定し、第14・15トレンチでは堀底まで検出した。他の調査区は、水際で石積が確認された主郭部南側部分に適宜設定したもので、合計130m²を調査した。主郭部南側・西側から検出された数種類の石積には、武田氏館の使用時期のものと、笠堀が溜め池として維持・管理された江戸時代以降の護岸補強工事によるものがあった。調査は平成8年12月8日に着手し、翌年3月24日に終了した。

なお、この試掘調査の成果を多くの市民に知らせるため、現地説明会を3月9日㈯に開催した。110名の見学者があり、調査で確認された新たな事実と史跡の重要性を認識してもらうことができた。

平成9年度は、西曲輪南側の橋から西側を調査対象とした。トレンチは第16から第31まで16本設定し、調査面積は合計150m²となった。試掘調査は平成10年1月26日に着手し、3月30日で完了した。調査によって、堀法面の地山を掘り込んだ様子や土壌中段に部分的に設けられた石列が數か所確認された。

第2節 堀試掘調査

1 平成7年度調査

第1～3トレンチは堀底まで掘り下げた。第1トレンチは1.5m、他のトレンチは約4mの堆積層が確認されたが、堆積土は水分を多く含み軟弱なため、第1トレンチ以外のセクション図の作成は行わなかった。

第1トレンチ(図24)

堀底から西側の土壌上面まで、高さ13mを測る。土壌の傾斜角は約40度であるが、水際にながらかなテラスを設け、そこから約75度の勾配で堀底に至る。東の道路側は法面に屈曲があり、堀底からの立ち上がりは約50度、次いで約78度と急勾配になり、中位より約40度となる。堀底から道路面までの高さは8.8mである。堀底は平坦

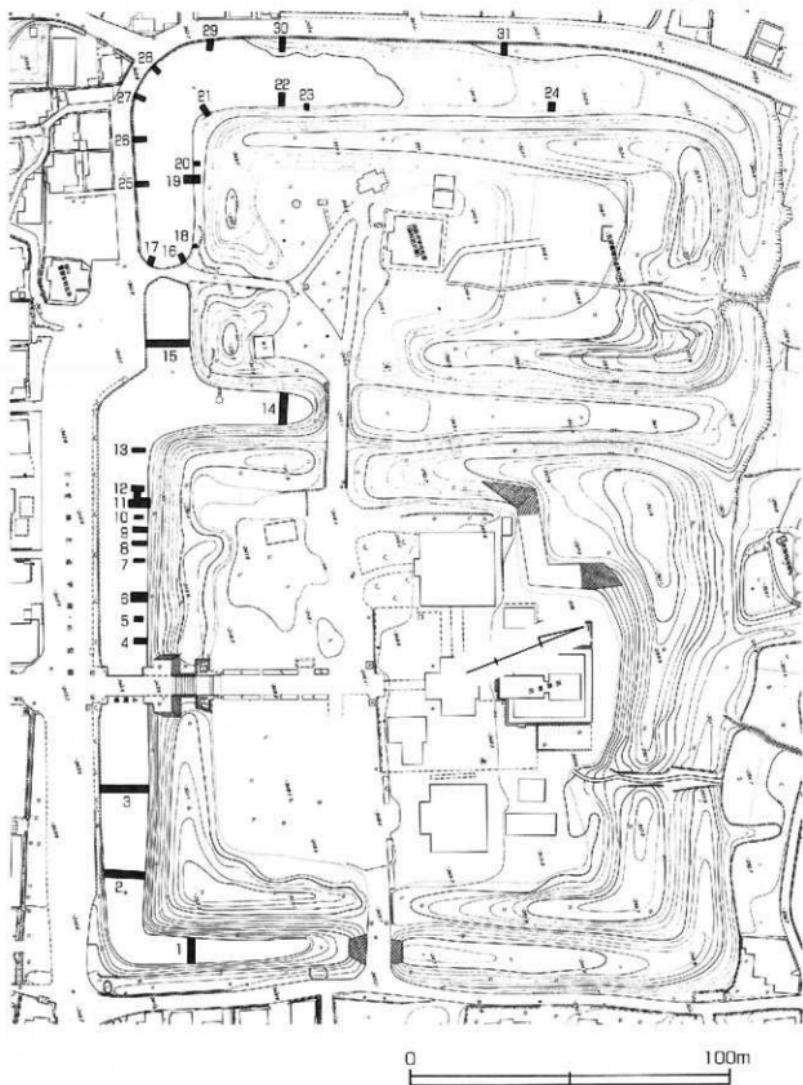


図23 堀試掘調査トレンチ配置図

で、幅5.5mほどある。約1.5mにわたり堆積物が確認され、堀底の直上からは中世と考えられる常滑焼の細片が検出された。東・西の堀法面には石のなだれこみが見られる。

第2トレント(図24)

堀底から土壘頂上まで16.8m、道路面までは8.3mを測る。堀底は半円形状を呈し、上堀側は中段テラス約37度、土堀傾斜角約33度、道路側は中位で約28度から約10度に傾斜が緩やかになる。堆積層は約4mあり、堀底から背疊(図29-11)が検出された。

第3トレント(図24)

土堀側は堀の立ち上がり約60度、中段のテラス約26度、土堀傾斜角約40度で、堀底から土堀上面まで16mを測る。道路側は約58度で立ち上がり、中位で約28度となる。堀底から石垣の上面までは8.3m、堀底は逆台形を呈し、底部の幅は約4mである。上堀側の堀底からは、2~3段に積んだ高さ約1.2mの石積が検出された(写真63)。裏込の有無は不明である。堆積層は約4.5mの厚さで、堀底よりかわらけ(図29-1~3)が出上した。

2 平成8年度調査

第6トレント(図25)

止間橋西側では、土堀に沿って東西20mの長さに築かれた雑壇状の石積がみられる(写真64~65)。水際の緩やかなテラスから堀法面の中位にかけて築かれた雑壇状の石積は小さな礫を用いており、波に浸食されオーバーハングした土堀基底部や堀法面の崩落を止めるため、近世以降に構築されたものと考えられる。

第6トレントでは8段まで確認されているが、最も下部に位置する1段目の石積は、他と異なり径40~80cmの比較的大きな石を積み、詰め石は極めて少ない。調査では約1mの高さまで確認しているが、さらに下方に続いていることが明らかである。第11トレント出土の下段石積との比較から、最下部の石積は館使用時期の石積である可能性が高い。

2段目以降の石積は径15~40cmの自然石を2~4段、高さ約60cmに積んでいる。各段の控えは約60cmである。

第5・第7トレント(図25・写真66~67)

第6トレントを挟み、ほぼ同一レベル・同一ラインにおいて築かれた高さ50~60cmの2段の石積である。石材は長径40~60cmの自然石を横長に積み上げ、詰め石には径約10cmのものが使用されている。礫質の地山層に直接築かれるが、裏込石等の使用は未確認である。比較的

に大きな石を用いているが、構築時期の判断は難しい。

第11トレント(図26・写真68~72)

土堀際から堀底へかけ、形態の異なる上・下2段の石積が確認された。上段は土堀基底部の一角に部分的に施された石積で、勾配は約70度、高さ2.8m、幅3mを測る。使用する石材はほとんどが径20~50cmであり、中には径90cmに及ぶものもある。詰め石は径10cm程度であるが、裏込の使用については確認できなかった。石の積み方は不規則で、縦長に使用されたものもある。石積の西端はコーナーとも見受けられるが、明確な角石ではなく、脆弱な感じを受ける。この石積の東側は、中ほどから下方が地山に接するのに対し、西側は礫を多く含んだ盛土層となっている。

上段の石積は2.8mと高いが、土堀の中に食い込んで築かれていること、及び不規則な積み方であることから、武田氏の時代の石積と推定される。

下段の石積は上段石積と幅2.5mのなだらかなテラスを挟んで築かれている。勾配は約60度で、高さ3.5mを測り、第12トレントに連なっている。長径30~90cmの石が多く、詰め石には径10~20cmの小礫を用いている。石積の背後には、裏込とも考えられる径10~20cmの自然石が土砂と混在して見られる。石積の東側は上段石積と同様、地山面に接しており、積み方も似通っていることから、同時期の築造と考えられる。

第14トレント(図27・写真73~75)

第14トレントでは、堀底の段差や石積等が確認された。堆積層は3mを超えて、西曲輪側から多くの遺物が出土している。主郭部側の堀の立ち上がりは約74度で、途中で約50度と緩やかになり、上堀の傾斜角は約38度となる。堀底から土堀頂上までは14.6mを測る。西曲輪側は、立ち上がり約53度、中位約42度、上部約50度である。堀幅は水際で13.8mを測る。堀底は幅6.5mで、途中に70cmの段差がある。

主郭部側で確認された石積は3~4段に積まれ、高さ約1mを測る。石積は脆弱な砂礫層の上に径30~50cmの自然石を使って築かれ、径10cm前後の詰め石も見られるが、裏込は確認されていない。

第15トレント(写真76)

西曲輪土堀側の堀は約45度で立ち上がり、途中で約34度となだらかになる。堀に面した土壘の傾斜角は約48度である。道路側の立ち上がりは約69度で、中位から上部にかけて約56度となる。堀幅は道路面において約15m、堀底は幅約4mである。堆積層は4mほどであるが、遺物等は出土していない。

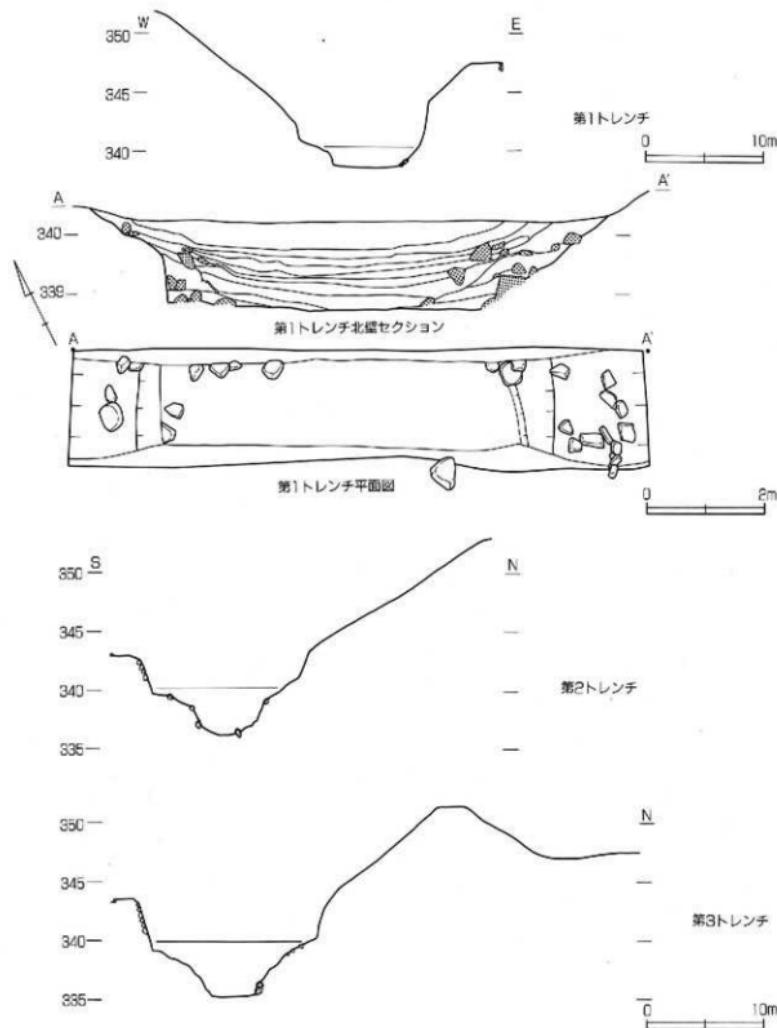


図24 第1・第2・第3トレンチエレベーション、第1トレンチ平面図・セクション

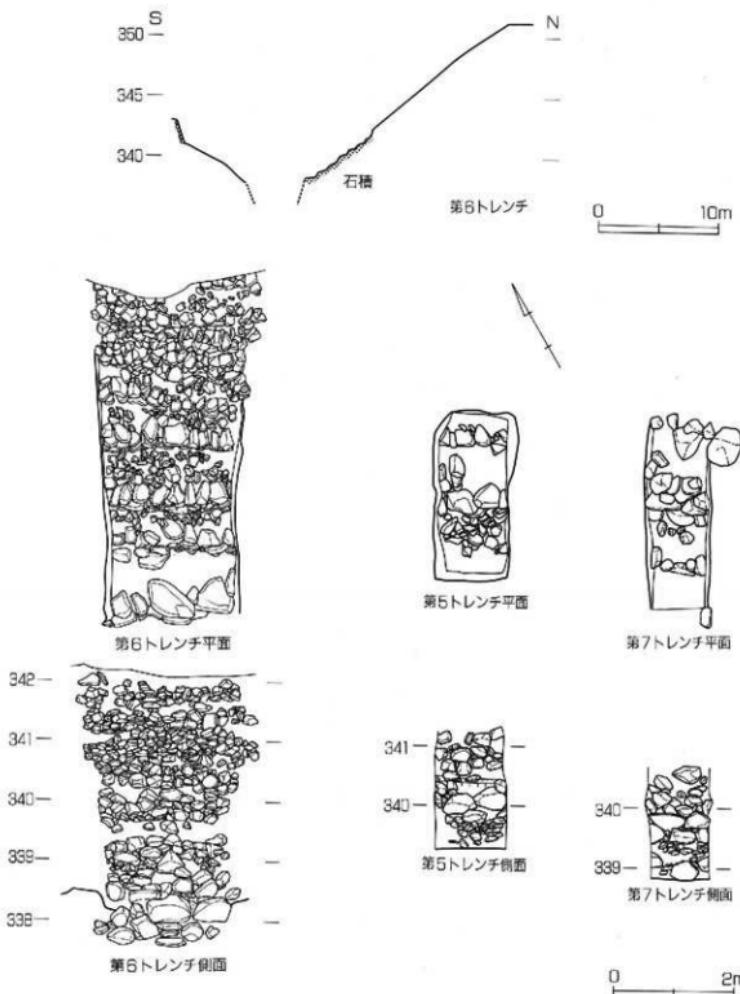


図25 第6トレンチエレベーション・平面図・側面図、第5・第7トレンチ平面図・側面図

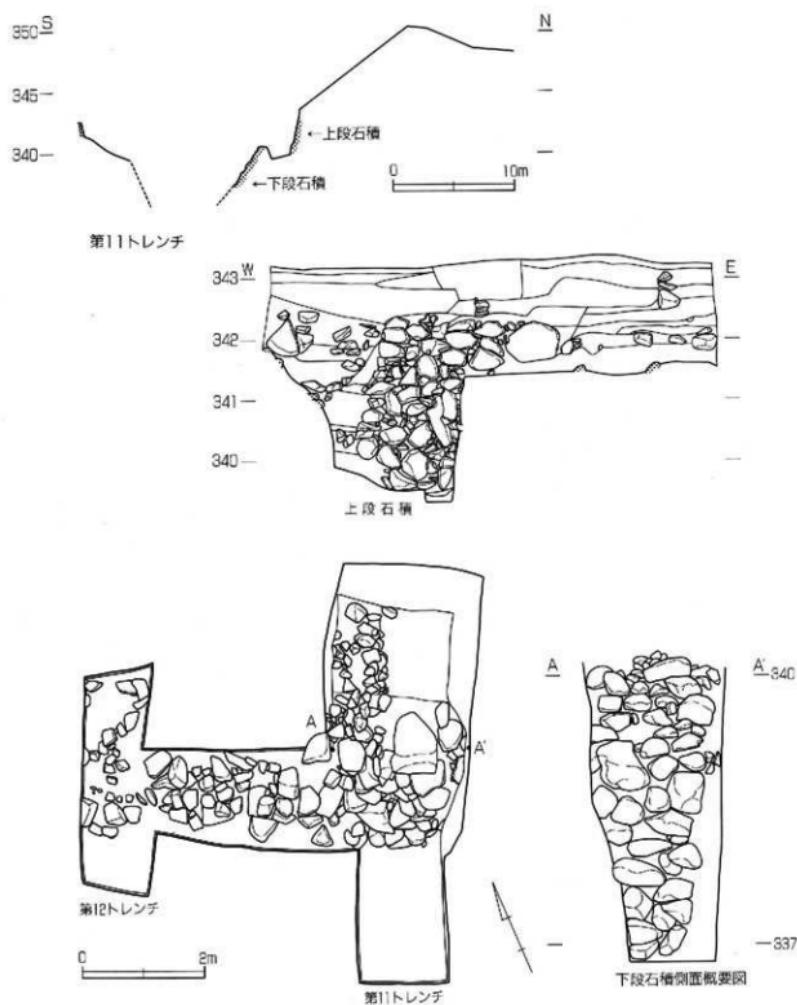


図26 第11トレンチエレベーション・平面図、上段石積・下段石積側面図

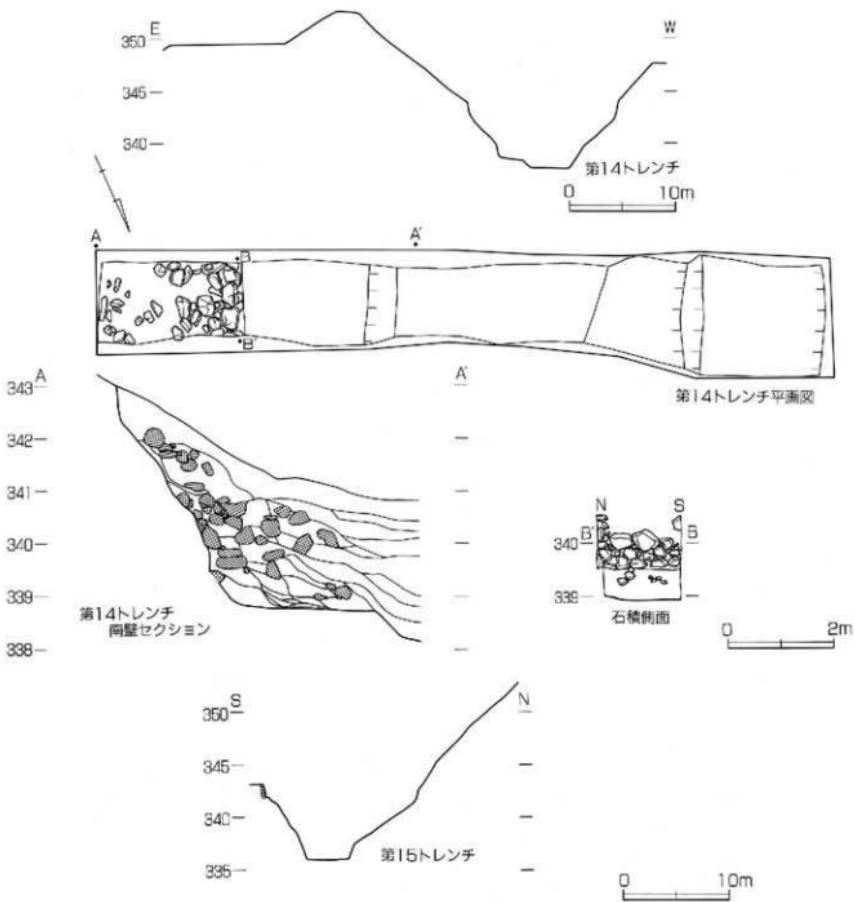


図27 第14トレンチエレベーション・平面図・セクション・石積側面図、第15トレンチエレベーション

3 平成9年度調査

平成9年度の調査対象となった西曲輪西側は、土壘の崩落が進んでおり、壠底へ大量の土砂が堆積しているため、壠底を確認することはできなかった。遺物は極めて少ない。

第16・第17トレンチ

西曲輪南側構形虎口前方の上橋の構築方法を把握するため、土橋の基部に両トレンチを設定した。その結果、堆積層直下において、地山である黄褐色土層と礫層が土橋基部の形状に沿って確認され、地山層を削り残して土橋を構築したことが判明した。

第19トレンチ(図28・写真77)

壠際の土壘斜面にかけてトレンチを設定した。この位

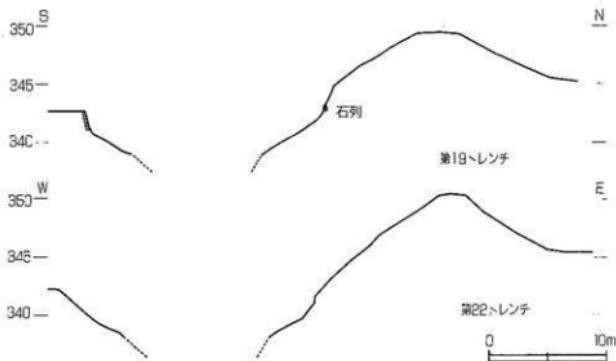


図28 第19・第22トレンチエレベーション

置での幅幅は20mである。土壌の立ち上がり部では、地山層直上にある厚さ10cm前後の整地層に、東西約11mにわたる石列が検出された。径20~40cmの自然石を横長に使用しており、東側では部分的に2~3段の石積となっている。石積の高さは約60cmを測るが、裏込は確認されてはいない。この石列は土基底部に埋められたものであり、同様の石列・石積が第22・23トレンチ間においても検出されている(写真78)。土星はこの石列部分から勾配を増す。

4 出土遺物

竪堀からは、土器・陶磁器・金属製品・木製品・石製品等が出土しているが、中世まで遡ると考えられる遺物は極めて少ない。このことは、部分的なトレンチ調査に起因するだけではなく、近世以降、灌漑用溜め池として繰り返し浚渫が行われことによるものと考えられる。第17トレンチの西曲輪側から出土した遺物が比較的多いのは、土壌を隔てずに居住空間と接していたためであろう。

かわらけ

かわらけは6点出土している。薄手・厚手の2種類が確認されており、ともに胎土の粒子は粗く、ロクロ成形を受けている。第3トレンチの堀底近くから出土した3点(図29-1~3)は何れもほぼ完形品で、直径は10.5cm、8.9cm、7.6cmである。

陶器

常滑焼片が数点確認されているが、器種・年代は不明である。

中國製磁器

第2トレンチからは龍泉窯系青磁(図29-11)、第16トレンチからは16世紀後半の漳州窯系染付盤の口縁部(図29-10)及び中国南部の染付磁器(図29-9)が検出された。

金属製品

古銭が2点検出された。何れも文字の判読はできない。

石製品

流紋岩製の砥石と、凝灰岩製の硯は、何れも第14トレンチから検出されている(図29-12~13)。他に安山岩製の五輪塔地輪1点が、西曲輪側水際の礫集中部分から発見されている。

木製品

第3トレンチから出土した遺物は折敷と考えられ、推定8.6cm四方、厚さ3mmで、径2mmの孔が穿いている(図29-15、写真81)。

自然遺物

種類・部位不明の獸骨1点が、第14トレンチ西曲輪側底から出土した。

(第1節信藤祐仁、第2節志村憲一)

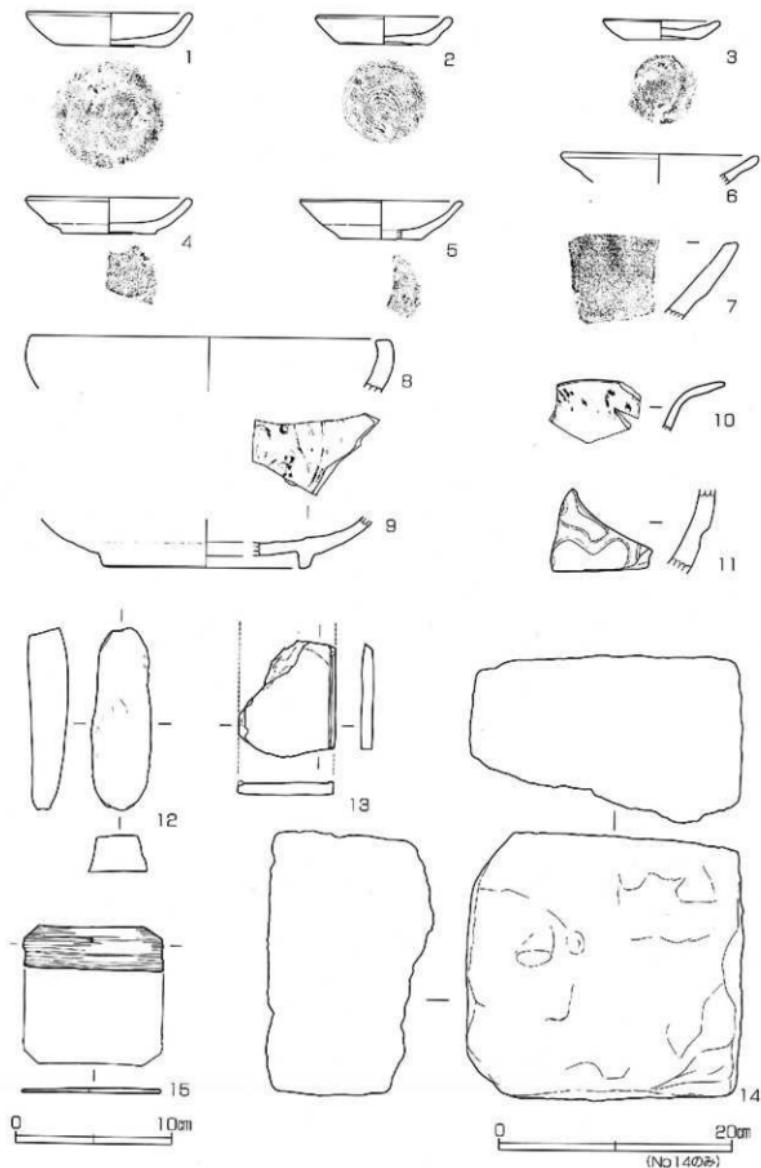


図29 堀試掘調査出土遺物



写真56 調査前（止間橋東側）



写真57 調査後（止間橋東側）



写真58 調査前（主郭部南西側）



写真59 調査後（主郭部南西側）



写真60 調査前（西曲輪南土橋西側）



写真61 調査後（西曲輪南土橋西側）



写真62 第3トレーニチ全景



写真63 第3トレーニチ主郭部側堀底石積



写真64 第6トレーニチ石積



写真65 第6トレーニチ石積



写真66 第5トレーニチ石積



写真67 第7トレーニチ石積



写真68 第11トレンチ石積



写真69 第11トレンチ上段石積



写真70
第11トレンチ下段石積



写真71 第11・12トレンチ



写真72 第11トレンチ内集石



写真73 第14トレンチ



写真74 第14トレンチ南側セクション



写真75
第14トレンチ堀底段差・
石積



写真76 第15トレンチ調査風景



写真77 第19トレンチ石列・石積



写真78 第22・23トレンチ間石積



写真79 第21トレンチ

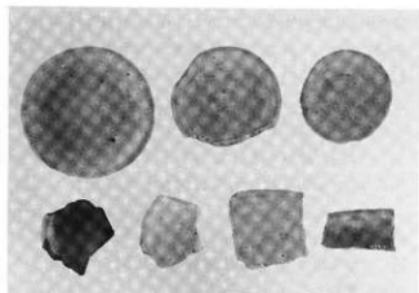


写真80 かわらけ・その他土器



写真81 中国製磁器・石製品・木製品・金属製品・獸骨

第4章 調査の成果と課題

第1節 西曲輪

西曲輪は『高白齋記』の記述から、結婚する武田晴信・嫡男義信の新居として天文20年(1551)に建設が始まり、同21年に完成したと考えられているが、北側樹形虎口に設定した第5トレンチの下層約1.5mの地点から大室1期の瀬戸・美濃系陶器を伴う西曲輪建設以前の石列が出土し、これをばほ裏付ける結果となった。また、西曲輪建設以前に主郭部に隣接するこの場所が整地され、館の付属施設あるいは家臣屋敷として利用されていた状況も把握できた。

樹形虎口と中段平場との間に設けた第10トレンチでは、西曲輪造成以前の整地層とともに、その直下から水田跡と推定される床土層と耕作土層が確認された。武田信虎が相川扇状地の一帯に館と城下町を建設した背景として、当時の集落が扇状地の外縁を南流する相川・藤川の両河川に沿って立地し、取水条件に恵まれない扇尖部が未開発地域であったことを指摘したことがあるが(数野1990)、今回の水田跡の発見はこうした考えを覆すものである。鉱造當以前の扇状地の土地利用について、今後、広範囲にわたる追究を行っていきたい。

武田系城郭の特徴を端的に示しているといわれる樹形虎口の調査では、北側の土橋接続部に設けられた1号門跡と、南側土塁対応部の2号門跡において3~4時期の変遷を捉えることができた(図30)。土塁の一部を断ち割った第4トレンチ南、第7トレンチ東・西、第10トレンチ北のセクションの観察から、西曲輪の建設時に樹形虎口が設けられたことは確実であるが、2号門跡東側の土塁が現状より短かった時期があり、当初は土橋と2つの門が直線的に並ぶ構造であったことが判明した。これは、從来から指摘されている武田系城郭特有の樹形虎口である。

その後、上塁が西に延長され2つの門の位置がずらされたことにより、樹形虎口は土橋から入って虎口空間で2度折れ曲がり、西曲輪中段平場に至る形態となっている。この段階では、対応する上塁の間に礎石を使った門が建てられたが、さらに修築が加えられ、上塁先端の3面には石積が施されている。樹形虎口の構造を変えたり石積を構築したのが武田氏の時代なのか、武田氏滅亡後の再整備によるものなのか、早急に検討する必要性がでている。

また、この石積の高さと形状の解説も史跡を整備する上で、大きな検討事項となる。東・西から2号門跡に向かって延びる石積の天端を水平とするか、勾配をもたせるかによって、門の構造も異なるものと考えられるからである。

第2節 石積

武田氏館跡の石積は、味噌曲輪・中曲輪・堀の発掘調査や表面観察から現段階で4種類に分類する考え方方が示されているが(志村・佐々木1997、甲府市教育委員会1998)、平成9年度測量調査を踏まえ武田氏館跡に特有な石積の形態が明らかになってきた。これは、主郭部の大手上橋北面、北側上橋東・西面、西側土橋北・南面、及び西曲輪北東部堀法面に構築された段役に築成した石積で、高さ1.5~2.4mの石積を30~50cmの控えをとつて2~3段に構築している。西曲輪北東部堀法面の石積崩落部分に裏込石が露出しているが、裏込はさほど厚くないようである。段築は石積全体を高く、安定的に築くための技法と考えられるが、確認できる範囲では段築した石積の総高は4.8m以内である。使用した石は安山岩の自然石で、加工痕をもたない。

この石積は比較的に大きな石を使い、裏込をもつことから、武田氏滅亡後の再整備に伴い、徳川氏や豊臣氏の家臣によって築かれたものと考えられてきた。しかし、この種の石積の類例が現段階では佐賀県鳥栖市の勝尾城以外に見当たらないこと(註1)、及び徳川家康が甲斐国・他を領有した天正10年(1582)~同18年のいわゆる「五カ国時代」において徳川氏領内では石積・石垣を施した城郭が愛知県豊田市の大給城しか知られていない(高田1996)ことから、武田氏の時代に上橋等に段状築成の石積を構築した可能性がでてきた。徳川氏に統いて甲斐の支配者となった羽柴秀勝・加藤光泰の時代に、大きな削石を用いて本格的な石垣をもつ甲府城を築城していることを合わせると、武田氏時代に段状築成の石積を築いた可能性はますます高くなる。

もっとも、徳川家康が天正17年(1589)に甲府城を築城するため、石垣蓄積の専門技術者を甲斐に派遣しようとしたことが史料から窺われ(平山優1993)、武田氏館に石積を施した可能性も捨て切れない。「五カ国時代」の徳川氏により築城・修理された城館の調査事例の増加をまって検討を深めていきたい。

なお、石積や石垣については全くの門外漢であるが、上橋の石積には水平に横目地を通そうとする意識が希薄

第3節 堀

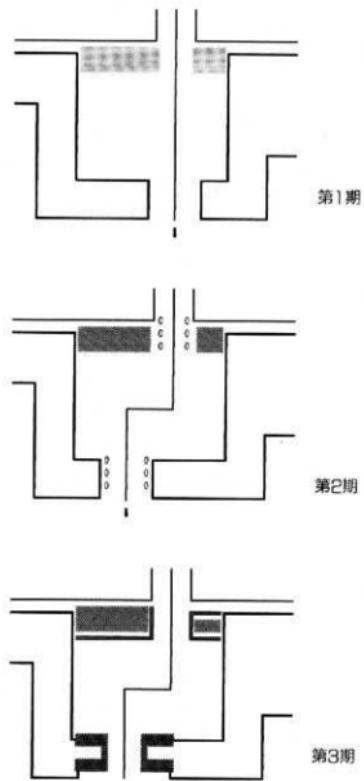


図30 西曲輪北側堀形虎口変遷想定図

で、半円状に掘られた堀底のラインに沿って下方から斜め上へと石を積む行為を繰り返しながら、次第に水平面を造成していったようにみえる。堀底を箱型状に整形せずに石を積みあげたり、堀底のラインに沿って斜めに石を積む技法についても、普遍性の有無を検証していくなければならない。

堀の調査では、木製品など大量の遺物の出土が期待されたが、検出された遺物は極く微量であった。これは、館の廃絶後から現代まで、堀が相川扇状地の一帯を潤す灌漑用溜め池として維持・管理され、繰り返し浚渫されてきたためであろう。第4トレーニングから第7トレーニング東側の緩やかなテラスから堀法面中位にかけて広がる礫壇状の石積は、溜め池の護岸工事により施されたものと考えられる。

一方、第11トレーニングから検出された上・下2段の石積は、積み方が類似しており、東側が地山に接しているという共通点をもっている。上段の石積が土塁基底部に食い込んで構築されていることから、上・下ともに館の使用時期に築かれたと理解される。下段の石積は裏込を施した可能性があり、高さ3.5mを測る。上段の石積も高さ2.8mを計測するが、上・下ともに積み方が不規則で脆弱な感じを受け、土橋の段状築成の石積とは異なった技法で築かれたことが分かった。現状では、武田氏の時代の石積と理解しておきたい。

なお、水際に近い土塁の基底部に石積や石列が巡っている状況が次第に明らかになってきた。土塁と水堀の境に設けられた緩やかなテラスには相当量の礫石が堆積しており(写真57)、2~3段の石積が水際を固めていたことも想定される。

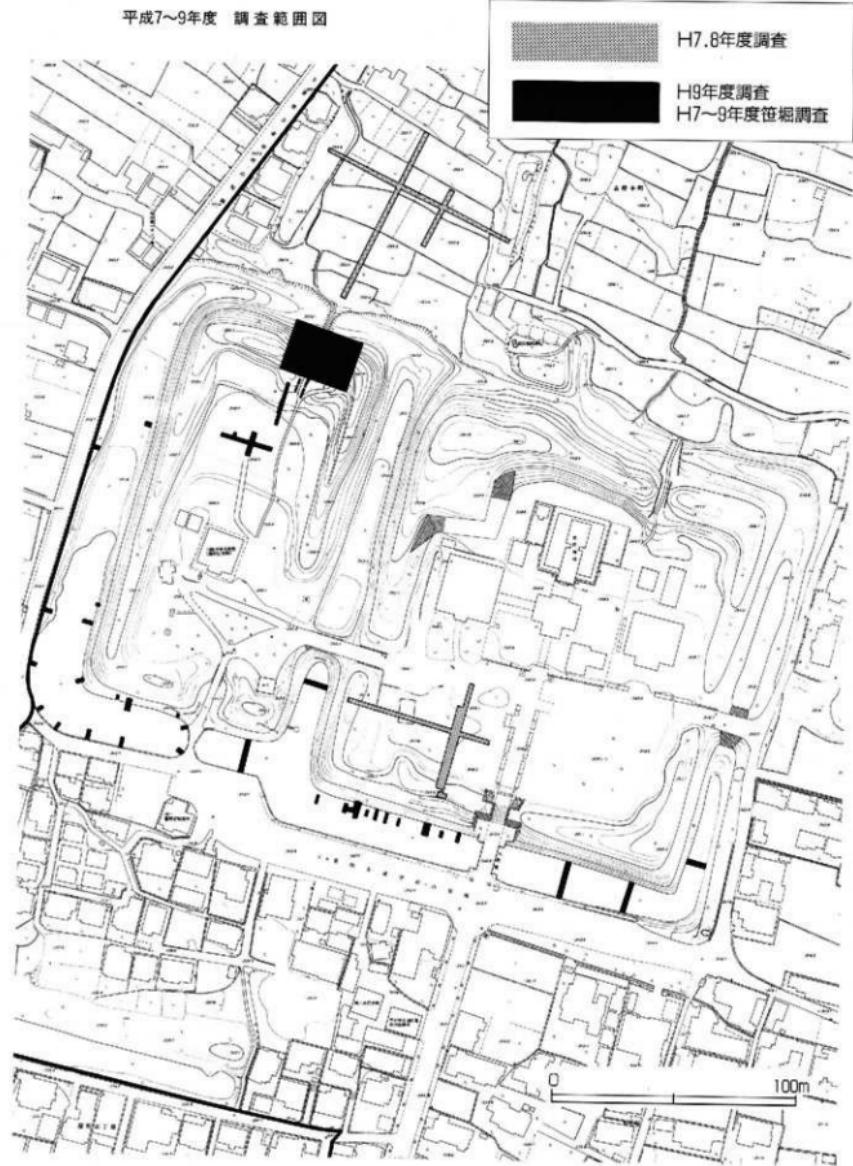
(数野雅彦)

註1) 鳥栖市教育委員会『戦国の城と城下町II—鳥栖の町づくりと歴史・文化講座』に写真と説明が載る。天正14年の島津氏来襲に備え、周辺国人・土豪衆の連合体によって築かれた石積と考えられる。武田氏の段状築成の石積が全て自然石なのにに対し、勝尾城では自然石と荒削した石材を用いている。

－参考文献－

1. 池田誠「武田氏築城術の一考察」『中世城郭研究』創刊号 1987
2. 池田誠「徳川家康築城技巧の一考察」『中世城郭研究』第10号 1996
3. 池田誠「徳川家康築城技巧の一考察－上・下総に配置された家康臣僚たちの城郭から－」『中世城郭研究』第11号 1997
4. 磯貝正義ほか編『日本城郭大系8 長野・山梨』新人物往来社 1980
5. 「甲斐国志」第2巻 雄山閣 1982
6. 敦野雅彦「形成期甲府の空間構成」『帝京大学山梨文化財研究所報』第5号 1988
7. 数野雅彦「中世城下町甲府の立地と都市プラン」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第3号 1990
8. 加藤理文「『石垣』の構築と普及（静岡県内の事例から）」『織豊城郭』第3号 1996
9. 北垣聰一郎「石垣普請」法政大学出版局 1987
10. 木戸雅秀「近世石垣事情－考古学的石垣研究を目指して－」『織豊城郭』第4号 1997
11. 「高白斎記」『武田史料集』新人物往来社 1967
12. 斎藤慎一「戦国東国の石工と石積み」『織豊城郭』第4号 1997
13. 「史跡武田氏館跡田」甲府市教育委員会 1998
14. 志村憲・佐々木謙「武田氏館跡の織豊期における諸問題について」『帝京大学山梨文化財研究所報』第30号 1997
15. 高田徹「北美濃の石垣城郭について」『織豊城郭』第4号 1997
16. 高田徹「三河における織豊期城郭の石垣・石積み－大給城を中心として－」『織豊城郭』第3号 1996
17. 中井均「安土築城前夜－主として寺院からみた石垣の系譜－」『織豊城郭』第3号 1996
18. 萩原三雄「丸島出の研究」『甲府盆地－その歴史と地域性－』雄山閣 1984
19. 平山優「甲府城の史的位置－甲斐国織豊期研究序説－」『山梨県埋蔵文化財センター研究紀要』第9号 1993
20. 八卷孝大「甲斐武田氏の築城術」『定本山梨県の城』郷土出版社 1991
21. 山梨県教育委員会「山梨県史資料編第8巻 近世1 領主」 1998
22. 松下浩「穴太積の再検討－北垣聰一郎氏の議論によせて－」『織豊城郭』第3号 1996
23. 鳥栖市教育委員会「戦国の城と城下町II 鳥栖の町づくりと歴史・文化講座－』 1998

平成7～9年度 調査範囲図



報告書抄録

ふりがな	しせきたけだしやかたあと				
書名	史跡武田氏館跡				
副書名	平成9年度西曲輪試掘調査・土橋等石積測量調査、平成7~9年度笠塙試掘調査、概要報告書				
卷次	IV				
シリーズ名	甲府市文化財調査報告				
シリーズ番号	8				
編集機関	甲府市教育委員会				
所在地	〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号 電話055(237)1161 内線3960				
発行年月日	平成11年3月16日				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度	東經 度	調査期間 調査面積
たけだしやかたあと 武田氏館跡	山梨県甲府市 占府中町 星形二丁目 大手三丁目	19201 01110	35° 40° 58°	138° 34° 50°	1995.12.06 1997.03.31 900m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
武田氏館跡	城館跡	中世	方形虎口、敷石状遺構、溝、門、石積	かわらけ、瀬戸・美濃、土壁、炭化穀子	

甲府市文化財調査報告8

史跡 武田氏館跡 IV

平成9年度西曲輪試掘調査・土橋等石積測量調査、
平成7~9年度笠塙試掘調査、概要報告書

平成11年3月16日

発行 甲府市教育委員会

〒400-8585 山梨県甲府市丸の内一丁目18番1号
TEL 055 (237) 1161 内線 3960
FAX 055 (226) 4889

印刷 横内山印刷所

〒400-0032 山梨県甲府市中央二丁目10-18

